
REBOOT

壬生一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REBOOT

【Nコード】

N3402M

【作者名】

壬生一葉

【あらすじ】

過去の想いに縛られたまま抜け出せないアズの目の前に、真逆なタイプの男性が二人現れた。アズは新しい一步を踏み出せるのか。。。

【1】（前書き）

申し訳ありません。

大幅な改稿を行いました。

やってはいけない事ですね・・・本当に申し訳ありません。

【1】

彼女の不透明な過去に少し触れ、憂いに包まれた彼女をクリアーにしようと男たちはこぞって手を差し伸べ、決まって言う。

「そんな男は俺が忘れさせてあげる」と。

けれど一向に晴れる事のない彼女の心に業を煮やし、やはり決まっ
てこう言い残す。

「今、誰の事想ってた？」

彼女も又、口にしてしまう。

「貴方ではない人の事。」

彼女には忘れられない人が居る。

この肉体が輪廻からだ転生しても、彼を想う心は引き継がれるだろうとさ
え思う。

彼女には、忘れられない人が居る。

【2】

あちらこちらでお皿にカトラリーがぶつかる音が聞こえる。
活気溢れるランチタイムで、選曲されたBGMさえ微かにしか耳に届かない。

「・・・又、別れちゃった訳ね、アズ？」

髪を頂頭部で緩く纏め上げた優香ゆうかが付け合わせのサラダを口に運びながら、あたしに視線を投げてきた。

対面する形でテーブルに腰を落ち着けているあたしは、申し訳ない気持ちを込めて優香を上目遣いで見上げた。

「・・・そっかあ、村瀬君なら大丈夫だと思ったんだけどなあ。」

「ごめんね・・・紹介して貰ったのに。村瀬君にも・・・嫌な思いさせちゃった・・・。」

「ううん、全然っ?! 村瀬君には最初からアズの状態話してあって、その上での紹介だった訳だし？」

・・・又良さげな人居たら紹介するよ。」

あたしはスプーンを持っていない左手を顔の前で振る。

「ううん良いつ・・・もお・・・ちょっと、暫くいっかな・・・

カレシは・・・ごめん。」

「疲れちゃった？」

あたしは考える。そして小さく首を傾げて言う。

「何か・・・慶太くん忘れる為の恋愛をしようとしてる自分が訳解んなくなってきた。」

「“忘れる為”じゃない!“前に進む為”の恋愛でしょ?!”

自分の事でも無いのに熱心に語る優香が大好きだった。

「紹介とは言わなくてもメンズとのご飯位付き合ってよ?。」

「あー何であたしは長続きしないかな、男と。好きな筈なんだけどなあ始まりは。」

「あ、アズの会社、異動とかあったんじゃないの？ あたし好みの男居たら紹介してね。」

「顔は？」

”そこからがつくから続かないんじゃない？”とは、言えないのだった。

5

事あるごとに立ち止まり振り返ってしまう自分が居た。

6年経った今でも、慶太クンに似た人を見れば手を伸ばし、慶太クンに似た声を聞けば顔を上げる自分が居る。

あたしの心は未だ今も慶太くんとの恋愛に縛られたままだった。

[illegible]

— — — — —
— — — — —
— — — — —

あたしが勤める印刷会社は本社を都内に置き、工場を郊外に持つ中堅の会社だった。

不況の煽りを受け少数精鋭で乗り切ろうと、今年度の新入社員はあたしの在籍する営業2課への男性社員一名となった。

「おはようございます。」

朝から元気の良い挨拶で2課のドアを開け放つ八神未来^{やがみ みらい}クン。

それが新人クンだ。

先に来ていた社員達がそれに返事する。

彼が席に着いたのを確認すると課内にあるコーヒーマシンから八神クンのコップにそれを注ぐ。

入社日にミルク1個と確認していた。ポーションを開けスプーンで攪拌する。

「八神クン、コーヒーです。」

彼に一声掛けてからデスクの脇に置いた。

「あ飯橋さん、あざーす。あミルク入り。」

人懐っこい笑顔を向けてくる彼。まるで子犬の様だとあたしは思った。

優香好みの顔かなと頭の片隅で思い、口元を綻ばせる。

次にドアが開き、八神クンと打って変わって仏頂面の上司、渡部^{わたべ}課長が入室してきた。

朝が弱い上に1課からの降格人事な上、常に機嫌が良くないらしい。それでも上司な訳で、社員たちは「おはようございます」と課長の耳に邪魔にならない程度の声を上げる。

「課長！おはようございますっ！！」

課長の席から一番遠い八神クンは立ち上がり、頭を下げる。
渡部課長は眉を顰めながら八神クンに視線を一度投げると、「おう」と片手を上げた。
少し見慣れたこの光景。

あたしは又席を立ち、課長専用のインスタントコーヒーを淹れる。
コーヒーの蓋には課長直筆で”渡”とある。

課長は38歳バツイチだと1課の女の子から聞いていた。
スーパーとかで籠にコレを放り込む課長の姿を想像して、ちらりと課長席を盗み見る。

欠伸をしながらマウスを動かす彼。不機嫌そうな表情は未だ崩れず。

対象的な二人だとあたしは”八神”クンと”渡部”^{かちよう}の事を思った。

「課長失礼します、コーヒーです。」
「……。」

今日も返事の一つも無し。これも何時もの事。

一つ間を置いて自分の席に戻る。
メールのチェックと2課社員のスケジュールの確認をするのが朝の日課だった。

「飯橋い、池田物流のチャートどうしたあ？」
梨田主任がチャート・ラックの前で声を上げている。
「今、プラスさんに回してませんでしたっけ。」

「あ、そうか、今日戻り？」
「はい、その予定です。」
「了解ー。」

課長席からの殺気に近い視線を感じ、左横を見ると直感は正しく課長の鋭い目があたしに向けられていた。

それから顔を逸らし、今日のまともな第一声を放った。

「主任、女に仕事任せないで自分でやって下さいよっ?!」

2課の空気が一瞬で凍りついた。

【3】

始業開始から30分も過ぎると、イントラのスケジュールに書き込まれた通りに営業マン達は出先へと出発していく。

八神クンは刷られたばかりの名刺を持ち、ネクタイの具合を確かめる。

課長も又、朝の顔からビジネスへの顔へと移行させバッグ片手に課を出て行った。

ガランとした机上のコーヒークップをトレイで回収し、流しに置いた。

一つ溜め息を吐く。

”女に仕事任せないで”

そう言った課長の声が頭の中をぐるぐると回っている。

悔しさが込み上げた。

社会人2年目、2課で2年目。

確かに課長に比べればヒヨコだし？ 確かに女ですけど？ と思う。それなりの努力は1年してきたし、営業事務である自分が営業さんのサポートするのが役目だと考えてる。

課長のあの発言は、男尊女卑にも甚だしい！

感情が高まって目がじわりと体温を上げた。

涙を堪えたくて下唇を噛んで、蛇口を捻る。課長の飲みかけのコーヒークップに激しく水が流れ込む。

茶褐色の液体がどんどん薄められて流されて行く。

「えーこれから渡部課長と八神の歓迎会を始めます！」
八神クンより数年先輩に当たる守屋さんが歓迎会の幹事を務め、宴は始まった。
会社から程近い、個人経営の居酒屋で2課が良く利用するお店だった。

金曜の18時半、小さなお店は満席に近く活気に溢れている。

課長は上座へ、八神クンとあたしは下座へ座っていた。

呑めないビールを乾杯の音頭と共に口にして渋い顔をするあたしに、八神クンはあたしのビールジョッキを自分の手元へと引き寄せ、代わりにメニューを広げてくれた。

「他に呑めそうな頼んだら？」

「あ、うん、ごめんね、あたしビール苦手で……。」

「見て、あそこにもビール苦手な人居るよ。」

八神クンが指差したその先に課長が居る。先程のあたしと同じように渋い顔をしている。

「課長あんな顔して下戸なんだって。あれで良く営業部のトップとかに居られるよな。」

酒の席だからか、同い年だからか八神クンは幾分砕けた口調で語らう。

「珍しいですなー男の人の下戸……あ、でも今は草食系とか流行ってるから……。」

じっと射る様に見ていた相手、課長がそれに気づく。

訝しげな視線を返してくる。

あたしは慌てて視線を落とし、自分が呑めそうなサワーを選ぶ。

「煙草、良い？」

「あ。うん、どう……。」

”どうぞ”と言いかけてあたしの身体が固まり強張る。
彼の手中に収まる小さな箱。

オナジ。

見慣れたセッター。

『内緒な』って慶太くんが誰からか勧められた煙草を口にした時の顔。

煙草の後のキスが、煙草臭かった事、今し方の事の様に鮮明に思い出せる。

「・・・飯橋さん？」

その声に、違和感を覚えて顔を上げる。

耳に、店内の喧噪が戻りつつある。

「あ・・・ち・・・がう・・・。」

違う、彼は慶太くんじゃない！ と心が叫ぶ。

胸が苦しくなって、息が詰まって、込み上げてくる涙を抑える事も出来なくなった。

目の前に驚きの表情を見せる八神くんが居る。

あたしは立ち上がり、スプリングコートとバッグを小脇に抱えて座敷を駆け降りた。

「飯橋さん?!」

あたしを呼ぶ声がした。

決して、想う人の声では無い。

【4】

俺は、指先で摘まんだ煙草を見つめる八神を見た。

「何なんだ？」

女が不可解な行動に出た事が理解不能だった。嫌悪の気持ちも隠さず声に表した。

乾杯の時のビール一口しか吞んでいない筈なのに顔が熱い。

俺の近くに座っていた敷田が飯橋の”発作”の話を始めた。

「俺達もはつきりアイツの口から聞いた訳じゃないんですけど・・・飯橋には高校時代に

付き合ってた男が居てそいつを忘れられないんです。同じ名前、似たような声、

似たような服装・・・その男を連想させるような物には過敏に反応しちまう。さっきみたいに

泣いて飛び出す位なら未だ良い。・・・一度だけだけど、わんわん泣きまくって正気の沙汰じゃない

時もあった・・・。」

敷田の話が終わるまで耳を傾けていたが途中から俺はうんざりしていた。

「くだらねー。だから女と一緒に仕事するのが嫌なんだ！」

手にしていた箸をテーブルの上に投げやる。

「課長・・・飯橋は良くやってくれています。認めてやって下さいな

んて偉そうな事言いませんし

彼女の発作についても理解して欲しいなんて課長にお願いする気
もありません。

・・・ただ彼女を、ただの雑用係とは思って欲しくありません。」
敷田が両拳を膝の上に置き少し頭を下げると、2課では未だ若手の
部類に入る守屋もそれに倣った。
主任である梨田までも。

俺はこの2課の妙な結束力をくだらないと感じていた。

1課では、営業同士、腹の探り合いだった。
営業成績を稼ごうと常に足を引っ張り合う。それが俺が居た1課。
此処は、温い。

職場で仲間だとか、そんなのは生温い。

「お待たせしましたー！」

神妙な面持ちの男達の前に元気の良い店員がオーダーした飲み物を
持ってきた。

下座に座る八神の目の前にグラスが二つ置かれた。

そのの一つを八神が持ち立ち上がる。そして俺の前に差し出した。

「おお悪いな、八神。」

「それ飯橋さんが注文してくれました。」

そう言って俺の顔を見る。

「そうか。」

俺は端的に応じてウーロン茶を口にした。

「自分、ちょっと行ってきます。」

「飯橋、駅に向かって歩いてると思うから。」

敷田が八神に声を掛けると、八神は「うす」と目を細める。

煙草を上着の内ポケットに挟み込んだ八神は、自分の為でもあった歓迎会を放り出した。

俺は、情に流されやがってと心の中で悪態を吐いたが、他の部員達は口元を緩め八神を見送った。

誰かを想って、その想いに振り回されるなんて馬鹿らしい。想いに縛られて落ちて行くななんて、まっぴらだ。

心変わりなんて、誰にも止める事は出来ないのに。

俺は、頭の中に浮かんだ女の顔を払拭する様に頭を振った。

そして、未だテーブルに在ったビールジョッキの取っ手を掴み上げ煽る。

いい加減忘れろ。

あんな女の事は忘れてしまえ。

そう脳は命令するのに、心がそれを許可しない。許可、出来ない。

左手の薬指の小さな黒子。

「理人^{りひと}、おんなじね、コレ。あたし達生まれの時から出逢うのが決まってたんだわ。」

そう言って指の背を合わせあった、涼香^{すずか}。
二年前の今頃迄は、俺の妻だった女。

この黒子が今は恨めしい。

ウーロン茶の中の氷が音を立てて見せる角度を変えた。

頼みもしてないのに、下戸の俺に用意されたお茶。

良く気付く女なのだ。

1課で、こんな事あっただろうか。

飯橋^{いいはし あずみ}愛純^{あずみ}って名前だったか。

右手の人差指をグラスに突っ込んで、氷を掻き回した。

その冷たさが、火照った頭には丁度良い。

顔を上げると、2課の部員達はさっきの飯橋の事態をしみttたれた様に話すのではなく、八神の動向を茶化すように話していた。

俺は、この課に溶け込むだろうか。

無理だろうな、こんな温い職場。

俺は必ず業績を上げて1課に返り咲く。

俺を蹴落とした奴ら全てを見返す。

これは俺に課せられた試練なのだ。

【5】

駅に向かう足取りは重かった。

「違う。」

又、ぼそりと口にする。

あれは慶太クンのものじゃない。

「飯橋さん。駅まで送るよ。」

突然掛けられた声に驚き、あたしはビクリと身体を揺らす。
振り返ると八神クンが居た。

あたしの速度に合わせて彼はゆったりと歩く。

「・・・誰かに聞きました？」

彼の顔を見る事は出来なくて、ただ先に続くアスファルトを見つめながら前に進む。

「元彼の事？」

「ん・・・。」

「皆心配してた。」

「・・・うん。」

無言の時間が通り過ぎる。

あたしはそれが苦しくなって立ち止まる。

「あのっもうこの辺で。八神クンは、お店に戻って。」

「鼻。赤い。」

「えっ・・・。」

慌てて片手で鼻を覆った。

彼は小さく笑う。そして真摯な眼差しを向けてきた。

「忘れなくて良いんだよ。その気持ちに自分で決着付けられるまで
縋ってたら良いんだよ。」

「え……？」

八神クンは口角をほんの少し上げる。

「忘れようとするから縛られる。縛られるから逃げられなくなる。
負のスパイラル、だね。」

彼の言葉に、足枷を片方外された、そんな感覚を覚えた。

初めてだった。

慶太^{もとかれ}を、忘れなくて良い そう言った男の人は初めてだった。

『そんな男忘れさせてあげる』と手を差し伸べる人は居ても、その
気持ちひっくりくるめて愛純だと寛容深さを見せたのは彼が初めてだっ
た。

「あ……ありがとう、八神クン。」

八神クンが大きく笑う。

「うん、そうやって笑ってて？ 飯橋さん笑ってる方が全然良い。」
銜いも無くさらりと言つてのける彼の言葉に、あたしは思わず顔を
伏せた。

「お店、一緒に戻らない？」

「え……あ、でも……。」

飛び出してしまった時の状況が浮かんできた

「課長も心配してると思うよ、きつとね。」

そんな訳ないと思う反面、八神クンにそう言われるとそうかもしれ

この人はあつたかい人だなあと、あたしは思った。

[illegible]

「はい。今日中で良いですか？」

「あ、飯橋さん、俺の also 良い？」

「で出来れば今日中で・・・。」

梨田主任から預かったのは、送り状の青焼きで原本と見比べ誤字等
か無いか確認する。

「・・・校正、得意なのか？」

声がして、あたしは辺りを見渡した。

2課の営業マン達は殆ど社を後にしていて、残るは、課長だけだった。

あたしはゆつくりと左側に顔を向ける。

課長がこちらに顔を向けていた。

今の質問は課長から発せられたのだと脳が理解して慌てて答える。

「あ、はい・・・あ、あの・・・多分得意です・・・。」

先週の歓迎会、八神クンと共に戻ると課長以外の人間は二人を暖かく迎えてくれた。

けれど課長は、あたし達と入れ違う様に席を立ったのだった。

「・・・今度頼む時があるかも、しれない。」

あたしを見ずに課長はそう言葉を掛け、席を立ち上がる。

それが凄く、不自然で・・・あたしは思わず口元を綻ばせる。

もしかして、彼なりにあたしを気に掛けてくれたのだろうか。

”今度頼む”と言うのでは無く、含みを持たせる言い方が課長らしいではないか。

やはり、八神クンが言った通りだったのかもしれない。

あたしは都合良くそう思う事にした。

「か課長、あの・・・お役に立てる様に努力します。」

「・・・ああ。」

無愛想だけれど、きっと悪い人ではない。

それが課長に抱いた感情だった。

そして又デスクに視線を落とし、誤字誤植が無いか丁寧に校正を入れていく。

その時、制服のスカートのポケットの中で携帯が着信を知らせて震えた。

取り出し、携帯を開くと八神クンからのメールだった。

あの日、メアドを交換して以来の事。

今夜、空いてる？

彼は客先に向かう途中の筈で・・・あたしは心臓を速める。

彼の眩しい位の笑顔が思い出された。

【6】

校正の合間に元来の仕事である、発注作業や売り上げの打ち込みをしていく。

あつと云う間に終業時間を迎えていた。

守屋さんから頼まれていた校正はフィルム版のチェック。

それに取り掛かり始めた頃、営業さん達も続々と社に戻ってきていた。

「うわっゴメン、飯橋さん！ もう俺やるよ、帰って帰って??」
あたしが残業しているのに守屋さんが気付き、慌ててデスクにやってきた。

「あ、でももう後ちよつとですから。すみません。」

「守屋ーお前、あんまり飯橋コキ遣うなよお。」

「ひでー主任も校正頼んでたじゃないっすかあゝ。」

「それはそれだ。」

梨田主任と守屋さんのやり取りに皆が笑う。

あたしは2課のこういう所が好きだった。

1課は、こうはいかないらしい。

ちらりと課長を盗み見ると、彼は何やら文字を書きつけている様だった。

1課の営業事務の子が言ってた事を思い出す。

うちの会社の1課は花形であり、売り上げの中枢を完璧に担っていて課内でも競争なのだ。

そんな中、35歳の時に1課長に渡部課長がなったのは凄い事だっ

たつて。

そして今回の”降格人事”。

ほんの些細なミスで、足元を掬われたらしい。

確かに1課に比べれば2課は、のんびりとしているかもしれない。
悪く言えば、なあなあなのかもしれないけれど、チームワークは良いと自負していた。

最後の箇所のチェックを終え、ライトテーブルの明かりを消す。

「守屋さん、終わりました。校了だと思います。」

あたしは丁寧な封筒にフィルムを戻し、守屋さんに手渡す。

「あーありがとー！！ お礼に今日ご飯でもどお？」

「え！」

あたしは解り易い位に突然の誘いに、しどろもどろになってしまう。

さっきの八神クンからのメールに「空いてます」と返信してから、次の展開へのメールが届いていなかったからだった。

思わず、隣の島のデスクの八神クンを見た。

八神クンはこちらを見てにっこりと笑んでいる。

それが又、困惑の源になってしまう。

”守屋さんと一緒でも良いよ” なのか

”守屋さん行って良いよ” なのか

”俺と約束したよね” なのか

「あ、あの・・・。」

「あ、何か予定ある？」

返答に困るあたしに守屋さんが聞いて来る。

「あ、あ・・・。」

「守屋、お前が最後にそれ見て校了のコールしないで、どうするんだ。やる事やれ。」

「あ、はい、すみませんっ。」

課長に喝を飛ばされ、守屋さんは小さくなった。

あたしは胸を撫でおろし、更衣室に入室した。

着替えを済ませ、パウダーを頬にのせていると八神クンからのメールが届いた。

駅の改札で待ってる

あたしは、スプリングジャケットを片手に更衣室を飛び出た。

駅に着き、きよろきよろと辺りを見回す。

お互いが同時に待ち人を見つけ、二人で微笑する。

「走って来たの？」

八神クンは携帯を上着のポケットに仕舞う。

「え、うん・・・走ったの久し振り・・・。」

「ははは、良かったのに。前髪、上がってる。」

そう言って彼は空いた右手であたしの前髪に僅かに触れ整えた。

八神クンのその自然な振る舞いは、あたしの鼓動を痛いほど速くさせる。

あたしは戸惑っていた。

八神クンにとっては何の気なしの、友達にするそれと同じかもしれ

ないけれど、あたしにとっては少し勘違いを起こしそう・・・。

「店、北口なんだ。ちょっと歩くけど。」

「あ、うん。」

横に並ぶのが躊躇われて一步下がって彼の後ろ髪を見つめた。

今日どうして自分を誘ったのか、聞いてみたかった。
きつと・・・慶太クンの事を聞きたいのかもしれない。

「さつき課長に助けられちゃったな。」

「え？」

「ほら守屋さんが飯橋さんの事飯に誘ったでしょ、飯橋さん返答に困ってた時。」

「あ。」

あの時のやり取りをあたしは思い返す。

次に発した彼の言葉にあたしは、思わず歩みを止めた。

「俺が飯橋さん誘ったの、課長気付いたんだろうな。」

「へっ?!」

何て間の抜けた声が口から漏れてしまったのか。

あたしを振り返る八神クン。

「あれ、飯橋さん？」

「か課長が気付いたって?? どおゆー・・・意味？」

「・・・あー、飯橋さんからオツケーの返信貰った午後、俺課長と同行だったの。丁度良いやって

”うちって社内恋愛禁止ですか”って聞いた。禁止じゃないって、
勧めないけどなって。

課長らしい言い方じゃない？ ふふ。」

あたしは口を少し開けたまま目を瞬かせる。

課長と同行・・・社内恋愛・・・勧めない・・・
八神クンの言葉が脳内を駆け巡る。

「・・・え。八神クン・・・？ あの・・・。」

戸惑いの色を隠せないあたしに、八神クンは満面の笑みで応える。

「俺と恋愛してみない？」

7

「・・・え、あ、え？」

「俺を恋愛対象として見てって事。出来れば付き合おうの前提で。」

八神クンは臆することなく、あたしにそう言った。

それは仕事を頼まれた時くらいの何気ない調子で、あたしはどうして、どうやって応えたら良いのか言葉を詰まらせる。

「腹減った。行こ？」

無理強いをせずに前へ進もうとする八神クンの姿勢は、あたしの心にじわりと沁み込んでくるみたいだった。

あたしの中で、八神クンの悪い印象は何一つ無い。

むしろ好印象。

けれど、つい先日”恋愛は暫く良いかな”と優香に宣言したばかりだった。

八神クンに連れられてやってきたお店は『居酒屋 BAR』と言った。

「大学ん時の友達がね、やってんの、ココ。ふざけてるでしょ、バ―って。」

引き戸の入り口を潜りながら彼は言う。

「いらっしゃい、おっ未来、久し振りじゃん。」

「おう、個室空いてない？」

「見りゃ解んだろ、空いてるよっ！」

二人のやり取りにあたしは笑った。

「こんばんわ。」

カウンター越しに、彼の旧友に挨拶をする。

「ども！ 未来が女の子連れなんて初めてじゃんよ。」

「くっくっ、この店に来るのが初めてだよ、玉木！」

あたしは吹き出す様に笑った。

タマキと呼ばれたその男性は、眉間に皺を寄せる。

「お前の株を上げてやろーと思った俺のレスポンスをそう返すんじゃないよ。」

「上げて貰わなくて良いって。じゃ奥、入るから早めにビールと枝豆持ってきて。おいで？」

「あ、うん。」

小さなお店に見えて奥行きのある造りだった。

頼んだビールと梅サワーが届いてグラスを傾ける。

「お疲れー。」

「お疲れ様です。」

体にアルコールが浸透して行く。

今日は息つく間もない程だったから、何時も以上に巡りが良いようだ。

「仲が良いんだね。」

あたしはカウンターがあった方をちらりと見やる。

「高校大学と一緒にだったからね。悪友って言うのかも。」

そう言う八神クンの顔は何か嬉しそうで、あたしは、優香の顔を自然に思い浮かべた。

「飯橋さん、さっきのあれ本気なんだ。」

ビールジョッキをテーブルに置いた八神クンの台詞に、一気に現実に引き戻される。

顔が赤くなるのが自分でも解るようだった。

「直ぐにじゃなくて良い。・・・こうやって仕事終わって一緒に飲んだり、たまには休日に

映画行ったりご飯食べたり、そーゆー所から始めない？」

「や八神クン？・・・あの・・・どうしてそう思うの？・・・あたし達未だ会って一ヶ月も

経ってないし、あたしもそうだけど八神クンだってあたしを知ってる訳じゃないよね・・・。」

「一目惚れ」・・・なんて、情熱的でも無い。正直に言っちゃうと先ず笑った顔が可愛くて

良いなーって思った。」

ここ数日の八神クンの言動には驚かされてばかりだ。

社内に居る時の八神クンは先輩達に弄られるキャラなのだが、こうして対峙してみるとハキハキと思った事は直ぐ口にする様だし、ぐいぐいと引っ張る様な男らしさが垣間見える。

「上司の一言で泣いちゃうとことか、それでもちゃんとその上司に気を遣えるところ、とかも

良いなーって思った。それでも・・・今日誘うのには結構勇気要ったんだけどね？」

八神クンが枝豆を手取る。

「俺を知った上で先に進むかどうか考えない？　それとも、もう恋愛はしたくないか思ってる？」

あたしはそれに対してふるふるすると首を横に振る。
すると八神クンが目尻を下げて微笑む。

眩しいな。

こんな風に男の人に告白されたのは初めての事で、勝手が違つと云うか、すっかり彼のペースだった。

L

「飯橋さんの気が変わらない内にね、詰めるところは詰めておかないと。営業マンの基本でしょ。」

八神クンのビッグスマイルにあたしはある種の尊敬を籠めながら微笑み返す。

二人は主に同じ課の守屋さんや梨田主任を酒の肴にして、4時間以上その店で語らっていた。

「未来、本当に良い奴なんだ」と。

あたしはそれに対し、頷いて店を後にした。

[illegible]

土曜日。

あたしは待ち合わせの駅の改札に八神クンが立っているのを見つけ駆け寄った。

「八神クン、ごめんね？ 待った？」

左腕にはめた時計を確認しようとした、その手を八神クンが優しく包み込む。

「待ってない、時間通り。行こう？」

駅から映画館に向かって歩き出す二人。

八神クンから何時もの香水の香りがした。

メンズライクと云うよりは、ユニセックスな香りで私服の時でもこれをつけてるんだなあと思う。

ぴったりサイズのTシャツに細身のカーキ色のカーゴ。黒のスプリングジャケット。

あまりにも長い時間見ていたからだろうか、八神クンと目が合った。

「あ……。」

恥ずかしくなってあたしは目を逸らそうとする。

「何？」

けれどそう問いかける八神クンの優しい笑顔から目が離せなくなっ
てぼつりと言葉を漏らす。

「……八神クンっぽくてカッコいい格好だなんて……思って……」

「本当？ 嬉しい。飯橋さんも、っぽい！ 足綺麗だからワンピース似合う。……って

これセクハラっぽい？」

先日の夜以来の、職場の顔じゃない二人。二人だけの時間。特別だけど、それは決して非日常的なものじゃなくて、心は凪いでいた。

映画は面白く、その後のランチでも他愛のない会話に花を咲かせた。

【8】

「え？ ダブった？」

「・・・ん。高校2年の時に・・・。」

「あはは何で、日数足りなかったとか？」

その一言を放った時の八神クンには未だ、余裕と笑みが見られた。
「・・・。」

八神クンを見ていたら躊躇われるあたしの過去の吐露。

あたしが俯き耳に髪をかけた仕草を見せると彼の声が少しだけトーンを落とす。

「もし。」

八神クンは口に運び掛けたグラスをテーブルに置く。

「もし、話せるなら話して？ 話せないならそれで良い。」

あたしは顔を上げた。

そう言ったのは、やっぱり八神クンが初めてだった。

大抵の男性は”話さなくて良い”と言ったからだ。

「・・・八神クン・・・あたしは弱かった。この話を聞いたら幻滅するかもしれない・・・。」

それでも・・・貴方に聞いて欲しいと思う。」

「ん。俺も飯橋さんの事、知りたい。」

二人は静かな場所を求めて、店を後にした。

喧騒を逃れて、川沿いの遊歩道を肩を並べて歩く。

あたしは、肩から斜めに掛けたバッグのショルダー部分をぎゅっと握り締めた。

「高1ん時に凄く好きな人が出来て・・・慶太くんって言うんだけど・・・2コ上の先輩で・・・

彼から告白してくれて付き合い始めたの。・・・凄く嬉しかった。全部が初めてだった。

初めての恋で・・・一緒に学校から帰ったり、寄り道したり・・・ホントにあたしの毎日は

慶太くんだった。」

八神クンはあたしが話し易い様に、下手な相槌を打つ事無くただ隣に居るだけの存在を維持してくれていた。

「慶太くんが大学に上がると毎日会えない事が苦しかった・・・忙しいのか電話もメールも

二人で会う時間もどんどん・・・どんどん減った。」

息が、胸が苦しくなって、あたしは足を止めた。

だけど、顔を上げて隣に居る彼を見る事はしない。

八神クンのスニーカーもその場で歩みを止めた。

「何だか・・・嫌な予感がした。あれは夏休みで。」

聞いて欲しいと言ったのは、自分なのにとあたしは思う。

八神クンに全てを知って欲しいのに、言葉が音になって口から出て

こない。

ショルダーを握り締めていた指が、硬い紐を解く様に八神クンの手に依って剥がされた。

俯く頂頭部には大きな手から体温が伝ってくるのを感じる。

「・・・今じゃなくても、良いよ。・・・ね？　未だ俺達に時間は有るんだから。」

あたしは決心を固めて、頭を振った。

「・・・いて・・・今、聞いて欲し・・・の・・・。」

過去の苦しみと悲しみが呼び寄せたのか、八神クンの優しさが心に染みたのか、あたしの頬を涙が伝った。

「好きな人が出来たって・・・あたし・・・じられなく・・・て、彼の家にもバイト先にも行って

それでも拒否されて・・・電話もメールも通じな・・・っふう・・・。」

あたしの手は八神クンの温かい手から逃げ出して自分の顔を覆った。

「リスカした。」

リストカット。

自殺行為。

「親に見つかって死ねなくて・・・退院して・・・やっぱり慶太クンにはれんら・・・れなく・・・て。

又切って・・・でも・・・死ねなくて・・・そればかり繰り返して・・・んか・・・

「もお・・・全部が、消えちゃえばって・・・家に火つけた・・・」

八神クンの手があたしの両腕を力強く掴んで、その身体に引き寄せた。
小さくなったあたしの身体はすっぽりと彼に包まれた。

「・・・親が泣いて言うの・・・もう止めてって・・・」

八神クンのジャケットの襟をめいいっぱい握って震えを隠そうとする。

膝も震え、立っているのがやっとだった。

「あたし。オカシクなっちゃったの。」

紡いだ言葉に嘘は無かった。

伝わっただろうか。

軽蔑しているだろうか。

顔を歪めて、今にも立ち去ろうとしているのだろうか。

何時までも顔を上げれずに居るあたしに降り注いだ八神クンの言葉は。

「よく・・・話してくれたね。」

蔑むでもなく、憐れむでもなく、あたしの心を悼む色を帯びていた。

だからあたしは、あたしはこんな女なのだと理解して欲しくて、その先も続けようとした。

「・・・病院に1年近く入院して・・・今は割と・・・でも、やっぱり・・・慶太くん

と何かが重なると・・・。」

「飯橋さん。」

「・・・。」

話の腰を折る様に八神くんがあたしの声を遮った。

「俺にそれをきちんと話してくれたって事は、少なからず俺に誠心誠意応えたいと

思ってるって、俺は思ってた良い？」

「え・・・ん・・・うん。」

見上げると八神くんが静かに微笑んでいる。

「・・・明日も、誘って良い？」

彼の言葉は、終わりではなく続きを告げている。

あたしは胸の奥から込み上げてくる何かを感じた。何だか胸がいっぱいだった。

「俺の気持ちは変わってない。飯橋さんと一緒に居たいんだ。」

差し出された八神くんの左手を、あたしは愛おしい気持ちを籠めて取った。

「
あ
り
が
と
う
。」
」

【9】

月曜の朝、コーヒーがコーヒーマーカーのデカンタに落ちる様を見ているあたし。

「おはようございますっ！！」

元気な八神クンの声が聞こえてきて、身体が少しだけ緊張する。

「うーっス・・・お前は本当に朝から元気だな。」

梨田主任が言っていると彼は

「良い事あったんで！」

と答える。

「？」

何だろう、良い事って・・・思わず給湯室の中からデスクの方へと顔を向ける。

そこから見えるのは仏頂面した渡部課長だけなのだけれど。

すると、課長の姿に被るようにあたしの目の前には八神クンの笑顔が現れた。

「おはよ。」

「あ、おはよ・・・ございます。」

土曜の事も、日曜の二回目のデートも現実だったのだと、夢じゃなかったのだと再認識した瞬間だった。

「俺、今日直ぐ出るからコーヒー要らない、です。」

「うん、解りました。」

プライベートとビジネスの挟間の時間。

二人は視線を交わすと小さく笑った。

「飯橋、コレ校正して。」

ぽんつと封筒がデスクの上に置かれた。

「あ、は、ハイ。」

そう答えたあたしの声が聞こえたのかも怪しい程、課長は既に2課のドアを開けて正に部外に出ようとしている所だった。

隣の島のデスクの梨田主任が

「照れてるんだろ。」

と茶化した。

「すげー、頼んでるのに偉そーっ。」

守屋さんが言う。

「偉い人ですよ、守屋さん。」

あたしは思わず突っ込んだ。

部内に残っていた人は皆、笑った。

何だか、八神クンとの事があって全てが幸せに思えた。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102

「アズ。」

コーヒーショップのカウンターに並ぶ行列の中で突然、名前を呼ばれた。

あたしはメニューを見上げていた顔を、隣に居る八神クンに移す。

「そう呼んで良い？ 二人で会ってる時。」

「あ、うん・・・うん、呼んで？ あ、あたしも・・・未来クンって呼んで良い？」

八神クンと二人っきりで会う様になってそろそろ一ヶ月が経過しようという頃、あたし達はちよつとずつ変化を始めていた。

平日は必ず会社で顔を合わせるのに、朝もお昼も、夜もメールを欠かさなくて、土日は殆どと言って良い程二人で過ごしている。

そんな中、名字で呼び合うのがちぐはぐ感を否めなくなっていて、隣合わせなのにほんの少し触れるだけの指に、もどかしい想いを抱いた。

あたし達は手を繋いで、見つめ合って、先へ進もうとした。

・・・あたしは性懲りも無く恋をして、彼の優しさに甘えて・・・だから気付かなかった。

未来クンが、決してあたしの前では煙草を吸わなかった事を。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

月末を明日に控えて、営業さん達は売上の起伝、あたしはそれの打ち込みに時間を費やし、一段落終えた頃には終業時間はとうに過ぎていた。

部内に残っていた課長と主任に声を掛けて更衣室に向かう。

制服のベストを脱いでロッカーに掛けるとドアがノックされた。

「あー、飯橋さん、お疲れー。」

「三代川さん、お疲れ様です。」

1課のベテラン事務の三代川さんがあたしの後ろにあるロッカーのドアを開く。

「月末は本当にバタバタだよねー。」

「あはは、ホントですねえ。1課は案件也多そうだからもっと大変そう。」

「皺が増えるわよ。あ、大変そうって言えば、あたしさっき2課に寄って来たんだけど」

渡部君、何かプリンターを前に悪戦苦闘してたわ。」

「え？」

三代川さんは、バレッタで留めていた髪をふわりとおろした。

「手伝おうか？ って声掛けたら大丈夫ですって。素直じゃないのよねえ彼。」

三代川さんからしたら年下にあたる渡部課長は、やっぱり、素直じゃないらしい。

あたしは手早く着替えを済ませて、「ちょっと行ってみます」と三代川さんに伝えた。

2課のドアを開けると、課長がプリンターの前に居た。梨田主任の姿は見当たらなかった。

「何だ？ 飯橋。」

振り返った課長が、帰った筈のあたしに驚いている。

「プリンター、調子悪いですか？」

「・・・あ、三代川さんに聞いたのか？ 大丈夫だ。早く帰れ。」

大丈夫そうではないのに、課長はあたしに背を見せた。

思わず、笑いが零れそうになるのを抑える。

「あたし、こう見えて機械に強いんですよ？」

「別に俺は機械に弱くない。」

それでも人に頼ろうとしない課長の横に立って、プリンターのディスプレイを覗きこんだ。

赤いランプが点滅していて、紙が詰まっている様だった。

あたしは思い当たる箇所を開き、チェックする。

「・・・そこは見たし、一枚抜いた。」

「じゃあ未だ何処かにあるんですね。」

ドラムを引き抜いて見る。白い紙が見えた。

「あ。」

声を上げた課長を見上げて、あたしは微笑む。

それを無事に取り除くとプリンターは緑の点灯に変わり、通常に動き出す。

「悪かったな。」

プリントアウトされた紙を手に取りながら課長はあたしにお礼らしき言葉を落とす。

不器用な人なんだろうなあと、あたしは思った。

【10】

それは単なる思い付きで。

朝だと思い目覚めると時計の針は10時を過ぎていた。誰に起こされるでもない、誰が待つでもない週末。

俺は、暫く外に干してもいない薄っぺらい布団から起き上がり、カーテンを引いた。

5月の温かい日差しが差し込む。

眩しさに目を細めて振り返る。目に付いたのはローテーブルの上に広げられた映画上映スケジュールのページ。

ランチ取りがてら、映画でも観に行くとするか。

大きくはない映画館。然程、宣伝もされていない仏映画だったが、座席は満席に近かった。

けれど幸運な事に後方の中央部が一つだけ、ぽっかりと空いていた。体を沈めたシートの前列に肩を寄せ合う二人。俺にはその横顔に覚えがあった。

俺から見て左側に座る飯橋が八神の方に顔を向け、微笑む。

小さな声で「良い席で良かったね」と言っている。

二人は俺に気付いていない。

思わず、席を立ちたい衝動にかられたが、気付かれていないのだし俺が撤収する筋合いでもあるまいと思い直し、映画に集中しようと

した。

映画が始まって30分程経った頃だろうか、八神の頭がゆらりと振れた。

それに気付いた飯橋が、八神の左肩に手を触れた。それでも八神が覚醒する気配は見えなかった。

俺は、あーあと思った。

映画の途中に寝るなんて失態だな、と俺は失笑する。

以前、俺も興味の無い映画に連れて行かれた上に爆睡し、ブチ切れた事がある。

飯橋が背筋を伸ばした。

「？」

何とか八神の落ちてしまう頭を肩に乗せようとしているらしい。

でも、それはギリギリで、飯橋は更に背筋を伸ばそうとする。きつとそれ以上は物理的に無理なのに。

映画が終わるまでの間、飯橋はずっとそうしていた。

エンドロールが消えかかろうとする頃、周囲が立ち上がり、ざわついて八神がやっと頭を起こした。

俺は思わず舌打ちをした。やっと起きたのか、と。

八神は場内が未だ暗い事もあり、小さな声で「ごめんっ」と両手を眼前で合わせた。

飯橋は片手を振って「あたしも実は、寝ちゃって」と答えたのだ。

力の無い声を出した。

俺はちらりとそれを見ただけで、パソコンの画面に又視線を戻す。

2課は送り状の印刷の他に、スーパー等で食品に貼られるシールも取り扱っている。

『3割引』や『今が旬』等と表記されているやつだ。

「飯橋さん・・・知らないよね？」

「ええちよつと・・・心当たり無いです。それってストアさんの？」

「そう・・・やべえ・・・来週末セールやるから大量発注するって言ってたんだよなあ。」

「今から型、作り直しますか？」

「クランクさん、やってくれっかなあ。」

「電話してみましようか。」

俺は舌打ちした。

「守屋あ、紛失はお前の管理の悪さだろ。事務員に言われてないで自分でやれ。」

「あ。ハイ、すみませんっ。ごめんね、飯橋さんっ。」

主任の梨田さんも居ると言うのに何故、守屋にやらせようとしななんだ。

飯橋が席を立つ。

何も告げず、2課を飛び出した。

暫くして息を切らしながら戻って来た飯橋の顔は満面の笑みを携えていた。

「守屋さんっ有りましたよ！！」

手には亜鉛板の抜き型。

「えっ!! どうしてっ!!」

守屋が飯橋の手からそれを受け取る。

「向かいのコーヒーショップに有りました。」

「えっ!!」

「守屋さん、其処でよくお茶してますよね。前にも携帯落として大騒ぎしてたのを思い出して。」

飯橋がそう言うのと2課の面々は大笑いした。

仕事に必要なものを余所で紛失するなんて以ての外だ。

加えてそれを飯橋にフォローされてる営業ってのもどうなんだ。

やっぱりこの課は温すぎる。

「飯橋さんつまじ助かったっ!! サンキュ!! 今度お礼させて!!」

頭を下げる守屋に対して飯橋は微笑んで

「たまたまですよ。ラッキーでしたね。」

と言う。

仕事の上では良い事務員だと言えそうだ。

人柄も謙虚だと言える。

俺は飯橋をそう分析しながら自嘲する。

ただの事務員に過ぎない。

1課に居た頃、事務員はただの雑用にしか思っていなかった。ベテランの三代川さんだって、そういう風に扱っていた。

なのに、飯橋を少し特別視してる気がする。
2課に感化されたか・・・？

【11】

「課長、飯どうしますか？ 次が13時からなんで先、食っちゃいます？」

梨田さんが、俺の営業振りを見て覚えろと八神に言ったらしく、八神と一緒に営業を廻る事が多くなった。

「そうだな、ちょっと早いけど食うか。」

「この近くにハンバーグ屋あるんスけど、其処どうですか？」

肉かぁ・・・若いな、コイツ。

「ハンバーグ以外にさっぱりした物あるのか？」

「パストラミサンドとかありましたよ。ってあれ、課長、肉受け付けないとか言うんスか??」

「がつつりはいかない。」

「てか、ちゃんと食ってるんスか？」

「お前は俺のお袋か。」

八神の手が俺の腹の辺りを擦る。

「ほっせ。」

「・・・まあ良い、たまには付き合う。」

俺がそう言うのと八神が嬉しそうに笑った。

コイツって大抵、笑ってるよな、悩み事が無い訳じゃないんだろうが。

店に入った瞬間、肉の匂いが漂ってきて俺は軽い胸焼けを覚えた。

八神はチーズが乗ったハンバーグを、俺はメニューの後ろの方にあるパストラミサンドとやらをオーダーした。

「あ、美味しいな。」

「でしょー？ それアズもうま、あ。」

八神は自分の失言に手で口を覆う。

「アズって飯橋の事か？」

「あ、はい。」

「付き合ってるんだろ？ 社内恋愛どーとか言ってたもんな、お前。」

「うーん、どうスカね。良い関係かなとは思ってますけど・・・付き合ってるって

思ってる良いのか、どうか。」

デカイ口を開けてハンバーグを放り込む八神。

どう見たって恋人同士にしか見えなかったんだがな。

「昔の彼氏の事、気にしてるんスよね、俺。忘れなくて良いなんて格好つけちゃったけど

いざ踏み込んだ時に、俺拒否られたらどーしよーとか？ かつこわり。」

「・・・忘れなくて良いなんて、お前器デカイな。」

「へ？ 課長だってそー言いそうなタイプに見えますけどね。」

俺はそれに対して何も答えず、曖昧に笑った。

涼香から離婚を切り出された時、俺はみつともない位、縋ったんだ。器なんかデカくないし、むしろ、そんなものは疾うに粉碎した。

「大体、そんな面倒な女、選ばなくたってお前なら引く手数多だろ、八神。」

「ぶはっ、面倒なっ。」

八神はナイフを持った右手の甲で口元を拭う。

「面倒では無いですよ、すげえ良い子。ただ、地雷は持ってる。だから怖いってのが

正直な感想。あ、コレ、男同士の話にして下さいよ?」

「じゃあ踏み込まなきゃ良いんだ。上手く仕事をやってもらうだけの女に思えば良いだろ?」

「・・・一緒に居たいと思ったんですよ、アズと。ただの同僚じゃ駄目だった。」

それだけです。俺、後悔とかすんの好きじゃないんスよね。やらない後悔より、やった後悔

の方が断然良いっスよ。・・・てか課長にはちよっと、がっかりだな。」

一回り以上も年下の八神が、急に大きく見えて、俺は思わず構えた。

「自分の過去の経験から、女を一切遠ざけてる様にしか見えない。それが恋愛だけなら

良いスけど、『人間関係』において女性を軽視してる節がありますね。」

「解った様な口、聞いてくれるな?」

「アズの事、面倒な女だなんて言いましたけど、課長も相当、面倒な男の部類だと思いますよ?」

怒声を浴びせたかった。それが正直なところだ。けど、俺は自分をコントロールした。

新卒の男相手に俺の何が解るって言うんだ・・・。ただコイツは青臭いだけだ。

自分が飯橋を守るんだと、自分に酔いしれてるだけの事だ。

「悪かったな。お前の女を面倒だなんて言って。」

俺は笑みさえも浮かべ、八神に言葉を返す。

その後、俺達は黙々と食事を続け、午後の営業の顔へと移行した。

涼香と俺は、24の時に友達の結婚パーティーで知り合った。

彼女の話は面白くて俺達は直ぐに意気投合。

長期の休みがあれば直ぐにでも飛行機に乗ってしまう程、旅が好きな彼女は奔放だった。

それでいて賢明で彼女は正に俺の理想だった。

俺は、どちらかと言うとインドアなタイプで本の虫。

それでも俺達は上手くいていた。

お互いを補う何かがあったからこそだ。

仕事が面白くなって彼女とロクに連絡を取らない日もあったが、その間、涼香は友達と旅行に行ったとか語学スクールに入ったとか、彼女は彼女の人生を満喫していた。

30歳の時に自然な流れで結婚をした。順風満帆な二人だと思っていた。

2年前、涼香から

「理人、好きな人が出来たの。別れて欲しい。」
と切り出される迄は。

晴天の霹靂だった。

【12】

満員電車の中は冷房が効く作動音がしているのに首筋の汗はちっとも引かなかった。

又今年も猛暑らしい。

朝だと言うのにこの暑さ、日中は何処まで上昇するんだろう。

あたしは何とか吊革に掴まり、電車の揺れと他人の荷重に堪えていた。

各駅停車の電車は、人を吐き出しては又多数を取り込む。

ふと反対側のホームに視線をやったら、彼を見た気がした。

「!!」

あたしは慌てて周囲の人達を掻き分け、扉が閉まるギリギリでホームに下りた。

近くの階段を駆け下り、反対側のホームへ続く階段を今度は掛け上る。

「慶太クンっ!!」

声にして彼の名前を呼んだ。

虚しくも電車はホームを離れた後で、あたしは彼を見失ってしまった。

「・・・けえ・・・た・・・ン。」

一気に体の力が抜けてあたしはコンクリートへとへたり込んだ。

慶太くんはあたしとの事を断ち切ろうとしてか、引っ越してしまっ
たし、誰もあたしに慶太くんの居場所を教えてはくれなくて、今、
彼が何処で何をして暮らしているか、想像する事しか出来ない。

でも、よく似ていた。

背はあれ位だったし、髪が少し伸びていた気がするけど、歩き方が
そっくりだった。

グレーのストライプのスーツを着ていた。

慶太くんはグレーが良く似合っていた。

これから会社に行くところだったんだろうか。

あたしと反対方向に電車に乗ると言う事は、勤め先は地元に近いの
だろうか。

「大丈夫ですか？」

その声にあたしは顔を上げた。

駅員さんが心配げな表情を浮かべてあたしの顔色を窺っていた。

「あ・・・はい・・・すみません・・・平気、です。」

あたしは彼の手を借りて立ち上がり、自分の乗るべき電車を目指し
て歩き出した。

会社には30分程遅れて到着した。

自社ビルの一階は、荷物の搬入の為に半分が倉庫、半分が車庫で配
送のおじちゃんが

「飯橋さん、どうした、寝坊かっ？」

と軽口を叩く。

あたしは適当に返事してエレベーターのボタンを押した。
手にしていたバッグの中から、携帯の振動音が聞こえる。

何件かのメールと着信、どれも未来クンからのもので。

あたしは弾かれた様に覚醒した。
未来、クン。

あたしが呼び寄せたエレベーターの扉が開くと、そこには不機嫌な
顔をした渡部課長が立っていた。

「邪魔だ。」

そう言いながら課長はあたしを避け通り過ぎた。
扉が閉まり、エレベーターは上昇を始める。あたしはただ、その音
を聞いていた。

あたし、慶太クンを想ってる。
今でも想ってる。

慶太クンがあたしに手を差し出してくれれば、あたしはその手を取
る。

今もこうしてあたしを心配してくれているのは未来クンだと言うの
に、あたしは慶太クンを心待ちにしている。

何時か現れてくれる事を、何時かあたしを抱き締めてくれる事を、
望んでる。

どんな顔をすれば良いの。どんな顔して未来クンと会うの？

そう思ったらあたしの身体は逃げる事しか出来なかった。
踵を返し、あたしは駅に向かう課長の背を追い抜き、走っていた。

応えられない。

あたしは未来クンには、応えられない。

「待て！」

手にしていたバッグを後方に引かれ、あたしの身体がガクンと揺れた。

振り返ると課長が呆れ顔をしている。

「遅刻の上に無断欠勤か。お前それでも社会人か？ 採用試験受けてうちの会社に入ったんだろ？」

何だ、コネか？」

「・・・。」

「お前の代わりなんて幾らでも居る。辞表を出せ。迷惑だ。」
ぐうの音も出ない。

「今日は5日、うちの支払い日だな。梨田主任が朝から経理に小切手の準備が整ってるか

確認しに行ってた。これは誰の仕事だ。」

「あた・・・しです・・・。」

そうだ、経理課で用意して貰っている小切手を取りに行くのはあたしの仕事の一つだ。

「・・・仕事に対して真面目な奴だと思ってたが、買被り過ぎた様だ。」

「！」

「2課の奴等はお前がこういう状態でも、”大丈夫”とか言うのか？ お前のとち狂ってるのをフォローしてくれるのな？ 甘えるな。」

課長の冷たい眼と正当な言葉があたしを刺す。

バッグの持ち手を握り直して、あたしは唇を一度噛む。

「・・・すみません。」

課長の盛大な溜め息が頭上に降って来る。

足元に落としていた視界から課長の靴が見えなくなる。

あたしは、会社に向かって走り出した。

エレベーターを待つのもどこかしくて、外階段を走る。

2課のある4階のドアを勢いよく開けると、皆の視線が一斉に集まった。

「お、おはようございます！ すみません、寝坊しました！！」

一瞬の間の後、誰かが笑った。

「寝坊かよっ！」

顔を上げて、真っ先に八神クンを見る。

ほっとした様に優しく微笑んでくれたいた。

胸が痛い。

この人を傷つけている事に心が痛む。

【13】

「今日、元気無い・・・てか、この一週間、元気無かったね。」

又しても俺の行動範囲内にこの二人が居た。何の悪戯かと思う。残業が長引いてコーヒーでも飲もうと駅前の店にやってきた。

店員の「いらっしやいませー」と言う声に意味もなく振り返ると、八神と飯橋が連れ立って入店した。

俺は思わず、窓の外を見てアイツらから顔を背けた。

しかも二人は俺の後ろの二人掛けの席へと腰を下ろした。

申し訳程度の観葉植物のお陰で、俺が座っている事に二人は気付いていないようだった。

聞く気は無いが聞こえてきてしまう二人の会話。

俺は思わず米神を押さえた。

「・・・何かあった？」

「未来クン・・・あたし、やっぱり貴方とはこうしてちゃ・・・駄目だって判った。」

・・・別れ話かよ・・・。

俺は更に溜め息を吐く。

「どうしてそう思うの？」

「・・・月曜日、遅刻したでしょ？ 寝坊じゃないの・・・来る途中の駅で慶太クンを

見かけたの。あたし、彼を追い掛けた。」

「・・・会えたの？」

「・・・。」

「彼を忘れられないから俺とは前に進めないって事？」

「・・・慶太クンと会いたいって思ってる自分が居るの。」

勝手な言いぐさだ。

けれど・・・飯橋が八神にコロリと寝返った訳では無かった事を、何処かで安堵する俺が居た。

「未来クン、あたし、未来クンを傷つけるよ、きっと、今以上に。そんなの嫌なの。」

「・・・アズ？ それは本心？」

「え？」

「君の言葉を都合良く受け止めれば、君は”俺を大切に想うから”続けられないに聞こえる。」

「・・・あたしはきつと慶太クンを探し続けるよ、未来クンと居ても。」

「アズ。」

飯橋の言葉を八神が遮る。

「もし、俺の事を何とも想ってなかったら”彼を忘れられないから続けられない”と

言えば良い。だけど君は今、言ったよ。俺を傷つけるのが嫌なんだって。それって

俺にも可能性はあるって事じゃないの？」

・・・は、馬鹿だ、コイツは。
イカレてる。飯橋は前の男が好きだって言ってる、どうしてそう解
釈出来るんだ。

「・・・俺、言ったよね？ 忘れなくて良いって。今でもその気持
ちは変わってない。」
「だけどっ。」

飯橋の声は涙声に変わっていた。

「正直、出逢って未だ数ヶ月なのに、何でこんなにアズに入れ込ん
でるのか自分でも
不思議。でも、どーしよーもないんだ。俺はアズの傍に居たいか
ら。」

きっぱりと八神は言った。

俺はコーヒーのカップに口を付ける。
どうしてか心が逸る。

八神を馬鹿な男だと思う半面、羨ましくも思う。

そして想う。

今、飯橋はどんな顔をして八神の言葉を聞いたのだろうか。

「アズ、俺と付き合おう？」
「・・・っふ・・・。」

を説いて来る。
喋りつくすと守屋は言った。

「渡部課長も参加するのが前提の納涼会です。お願いします、来て下さい。」

と頭を下げた。

未だ課内に残っていた敷田が笑う。

「課長、コイツ入社した時から新井さん新井さん言ってるんですよ。」

「だからナンダ。俺には関係ない。」

くだらない話に時間を費やした俺の貴重な事務作業時間を返して欲しいくらいだ。

「駄目っス！俺、部長の部下ですよ？」

「・・・守屋、お前幾つだっけ。」

「27歳になりました！」

「八神の方がしっかりしてるんだな。」

「うおっっ！！」

激しく守屋は後退した。

俺はそんな守屋を見て苦笑いするしかなかった。

「解った。ただしこれが最初で最後だ。しかも俺はそのアライを知らないからな。」

「あざーっス！！」

大分・・・俺は2課に洗脳されてしまっている様だ。

【14】

1課で飲み会は、締め括りの忘年会ぐらいしか行われなかった。

だから、どうしても大規模な飲み会にならざるを得なかった訳だけど、2課はそうじゃないらしい。

仲の良い奴等数名でちょこちょこ呑んでるらしく、成績争いってナンド？ 位の仲の良さ。

・・・それを羨む程落ちぶれちゃいないが。

で、守屋の言うアライを含む納涼会に出席した訳だけれど・・・何故コンパ形式？

俺の隣にはそのアライが、アライの隣に守屋。テーブル挟んだ俺の前に知らない女、その隣に八神、八神の隣に又知らない女。

一応、自己紹介された時に「〇〇課の・・・」と言っていたから社内の人間なんだろう。

得意先の人間の顔を覚えるのは早いが、興味の無いモノは全く無頓着だった。

「課長、下戸って本当ですか？」

隣のアライが箸を置きながら俺の顔を覗き込んで聞いてきた。

「ああ。」

「えーでも、一杯付き合って下さい！」

顔は確かに男受けする綺麗な部類に入る女だと思った。

メニューを広げ勝手にオーダーをする女でもある。

しかも、ウーロンハイとか頼んでるし・・・飯橋とは大違いだ。

で、その飯橋の男である八神が何で女二人に囲まれて笑顔で対応中

なんだ。

俺は思わず八神を見た。

「八神君って、車、何乗ってる？」

「八神君、お酒強いんだあ?!」

矢継ぎ早の質問を受け流す八神。満更でもない様な顔をしてるのを見て俺は内心、舌打ちした。

”飯橋”はどうしたんだ？

この会主催の守屋はと言うと、アライが完全に俺の方に体を向けてしまっているからなのか、八神側の会話に参加するばかりだった。

俺は面倒臭さを隠す事無く、溜め息を吐いて立ち上がる。

「ああん課長、何処行くんですか？」

「・・・便所。」

二度と守屋とは吞まねー・・・。

用を足し、手を洗っていると「お疲れっス」と言って八神がトイレにやってきた。

顔を上げると目の前の鏡の奥に八神の姿が在った。

「課長、今3杯目呑んでます？ 大丈夫ですか？ 俺、ウーロン茶に替えときますよ。」

確かに俺の顔が少し赤らんでいる。

「・・・コンパなんか参加してて良いのかよ。」

「あはは、守屋さんには困っちゃいますよね。つか新井さん、ガングラン課長攻めっスね！」

「・・・お前も楽しそうじゃねーか。」

「え？」

「飯橋との事で疲れるから、ストレス発散か？」

「・・・。」

鏡の中に映る八神の表情が厳しくなった。

「何が言いたいんすか？」

「女が居る癖にコンパに参加して、飯橋が可哀想じゃないのか？」

「・・・ご忠告有難うございます。でも今夜の事はアズも知ってる
事なんで、心配御無用ですよ？」

”面倒”なんてとんでもなかったな、出来た女で良かったなあ？」

俺は八神の横を擦り抜けて外に出ようとする。それなのに、八神の腕が俺を制止した。

「
・
・
・
何だ。
」

「課長、呑み過ぎつスよ。」

「はは、3杯程度で大したこと無い。」

そう言い八神の腕を押しつけようとしたのに叶わなかった。

足元がふらついて世界がぐるりと一周した。

[illegible]

靄がかかった状態の頭を覚醒させようと脳が働き出す。

寝返りを打つと、微妙な違和感を覚えた。

重い瞼を押し上げると天井が目に入った。見た事もないライトがぶら下がっている。

体を起こそうとすると頭に激痛が走る。

$$\left[\begin{array}{c} \text{L} \\ \text{S} \\ \text{O} \end{array} \right]$$

頭を押さえながら俺は又、目を閉じた。

そうか・・・俺、昨夜呑み過ぎたんだな・・・。

ドアが開く音がして

「あ、課長、起きてました？」

と八神の声がした。

俺が横たわるベッドの傍に屈みこみ、俺を見ている八神の顔は小憎たらしい程、清々しく見えた。

「・・・倒れた？ 俺・・・。」

声が掠れている。滅多に呑まない酒のせいなのは明白だった。

「トイレでぶっ倒れて、俺んちに連れてきました。部長んち、免許証見たらすげー遠かったから。

起きれます？」

「無理・・・。」

「ははは、でしょーね。今、お味噌汁作ってますから、持ってきてます？」

そう言われて初めて、室内に漂ってくる温かい匂いに気付く。

「無理してシャワー浴びちゃった方が少しスッキリするかも。」

「・・・頭いてえー・・・。」

「くっくっ、駄目な課長つてのも良いですね。」

「うるせー・・・。」

力の無い声しか出なくて迫力の一つも無かった。

「未来クン？ 出来たけど、どうする？」

「！」

俺は第三者の声に驚き、ベッドに手を付いて上体を起こす。

そこにはラフな格好をした飯橋が居た。

「・・・おはようございます、課長・・・。」

神妙な面持ちで飯橋は言った。

「二日酔いに何が良いか聞いたら、しじみの味噌汁が良いって言われたんすけど、うちに

無いから彼女が自宅から持ってきてくれて、しかも作ってくれま

した。
」

ありえねえー・・・
こんな情けない姿を飯橋に見られた。

【15】

課長が未来クンのベッドで驚いた顔をしてこちらを見ていた。

・・・きつと、あたしにそんな姿を見られたのが恥ずかしいのだろう。

だって、会社でのピリピリとした課長しか知らなかったんだし、正直、こんな気の抜けた課長を見るのは初めてだった。

「あの、じゃ、よそっておきますね・・・。」

あたしはベッドルームからキッチンの方へと移動した。

「シャワー何時でも使って良いですから。」

未来クンは課長にそう声を掛け、あたしと同様にキッチンに立った。

初めて訪れた未来クンのおうちは新築だという2DKのアパートだった。

「一応、おにぎりも作ったから、二人で食べて？」

「え、アズも食べていけば？ 朝早くから来てもらっちゃったし、お腹空いてない？」

今朝早く・・・と言っても6時頃、未来クンから「泥酔した課長を家に連れて来たのは良いんだけど何を食べさせたら良いかな」とメールが届いた。

幸運な事に我が家にしじみがあったから、届けついでに朝ご飯を用意したのだけれど、まさか寝起きの課長の姿迄拝む事になるとは・・・。

あたしは片手を振って辞退する。

「母親もあんまり朝早くて吃驚してたから、帰るね？ 未来くんは平気？」

「ああ俺は全然元気。」

「そお。守屋さん、新井さんと話せたのかな？」

「ぜーんぜんっ。」

あたしは口に手を当て小さな声で笑った。

「意外に駄目だよ、守屋さん。」

「っんと！ いっそ二人で食事とか行った方が良いのにな。」

2課で守屋さんが新井さん好きなのは有名で、あたしも入社仕立ての時にダシに使われ飲み会をした事がある。

その時も守屋さん、新井さんが誰かと話をしてるのを横で聞き耳を立てているのが精一杯だったのを昨日の様に覚えてる。

「あ、じゃあ帰る。」

「今日はありがとね。帰り気をつけて、帰ったらメール頂戴。」

スニーカーに足を入れ、つま先を数回敲きに打つ。

「自転車だと近いね？」

「何時でも来て？」

スウェットパンツのポケットに両手を突っ込みながら、未来くんは笑んで言う。

あたしは照れ臭くなって、後ろに束ねた髪を撫でる様に触れた。

「あ、お母さんにお礼言っておいてね？」

「あ、うん、じゃあね。」

「アズ、夜、会いたい。」

未来クンの声量は何時もと変わらずで、思わずあたしの方が、彼の後方のベッドルームが気になった。

課長に聞こえてしまう距離ではないのだろうか。

あたしの視線に気付いたのか、未来くんが苦笑いしてる。

未来クンとの事はゆっくりとだったけど、確実に前に進んでいた。

「お疲れさまー……。」

陽もどっぴり暮れた更衣室に1課の三代川さんと佐藤さんが入室してきた。

「お疲れ様です。ああ、凄いお疲れの様子ですね、お二人とも。」

佐藤さんはあたしと同列のロッカーを開きながら「あのバ課長のせい！」と言った。

「小野寺、課長ですか？」

「自分のミスを事務員のせいにして、仕事押し付けて帰りやがんのっ！！」

「渡部君はその点良かったわ。」

三代川さんがブラウスの釦を外しながら、あたしの方を見た。

「・・・渡部課長が2課に降格したから小野寺課長が1課の課長になったんでしたよね。」

「大したミスでも無いのに、バ課長がクレームです！　とかって大袈裟に吹聴したからなんだよ！

三代川さん、あれは全然課内でフォロー出来ましたよね？！」

「全然余裕でしょう。」

あたしはすっかり身支度を整えていたのだけれど、渡部課長の降格させられた理由を知りたくて動けなかった。

渡部課長がお客様から携帯で受けた発注をし忘れたと言うのが事実らしい。

又それが、再版で至急を要していた。

渡部課長が電話口で納期は5日後と言い、その日に納入されない事

でお客様から電話が入った。

その電話を受けたのが、小野寺課長だったらしい。

その当時は課長補佐に居て、課長の役職を狙っていたそうで、事を大袈裟にしたのだと言う。

2課でも発注忘れのミスはこれまで何度かあった。

それでも先ず責めたりはしない、全力で部員がそれを挽回しようと努力した。

もし、課長がその時2課で仕事をしていたとしたら、こんな降格人事受ける必要は無かった筈だ。

【16】

未来クンのおうちでの事があって以来、課長は少し、あたしに対して余所余所しい態度が続いていた。

当初から、仲睦まじい訳では無かったのだが、それとなく任せていくれた仕事も最近はめっきり減っていた。

三代川さん達から聞く課長は『完璧主義者』だった。

人に弱いのを見られるのが最も敬遠したい事だったのだろう。

しかも見られたのが部下である未来クン以外に、「女」であるあたしと言うのが又、ネックな筈だ。

来月の支払いのチェックをしていると、未来クンが声を掛けてきた。

「飯橋さん、もうそれ終わったら帰れる？」

「え？」

未来クンの思わぬ質問にあたしは腕時計を見た。

時計の針は、16時17分を指している。

「あれ・・・。」

あたしはマウスを動かし、パソコンの画面上の時計を見た。

17時53分と記されている。

「あ、やだ、これ電池止まってた。」

未来クンは笑う。

「全然急いでる気配も無いから、声掛けたんだけど。」

「やだ・・・これ、明日朝一に経理に回さないといけない書類だから、未だやっていきます。」

「そ、俺と守屋さん、BARで吞んでくから、もし終わったら来る？」

未来クンが入り口で待つ守屋さんを振り返った。

「玉木さんどこ？ うん、終わったたら寄るね？」

課内に三人しか残っていなかったのであたし達は普通に会話をする。
「ちょっとー俺待たせて二人でアイコンタクトすんなやー。」
ちよこつと遠くで守屋さんが口を尖らせている。

「今、行きますよ、じゃ後でね？」
あたしは頷いた。

二人がエレベーターで階下へ下りてしまうと、たちまち静かになった。

パソコンの動作音が響いて、窓の外の自動車の往来が聞こえてくるだけだった。

イントラのスケジュールを再確認すると、課長、主任、敷田さん直帰。

早く終えて戸締りしなくちゃ・・・。

金額のチェックを終え、デスクの上のコップを取ろうと左手を伸ばした。

ブラウスが肩に引っ張られ、左手首の腕時計が目に残る。

電池交換しなきゃ。そう思いながらステンの金具を外し、腕時計を手首から抜き、デスクに置いた。

「・・・。」

左手首のリストカットの痕。

最初に切った一番深い傷が今でも生々しく其処に在る。

最近・・・未来クンと居る自分が幸せだと思える事が増えた。
慶太クンとの事を『過去』に出来る様な気がしていた。

短い息を吐いてコップを持ち室内備え付けの流しに立つ。ブラウスの袖を捲ってスポンジを手取る。

洗剤を付けた所で、大きな音を立ててドアが開かれた。

「！」

思わぬ音にあたしは肩を縮ませる。

「・・・ざけやがって！！」

聞こえて来た言葉と共に、何かが投げつけられて又も大きな音がした。

「くっそっ・・・。」

今度はドンつと言う音。

あたしはスポンジを静かに置いて、給湯室から顔を出した。

未来クンのデスクを上体で覆い頭を抱え、空いた左の拳で何度かデスクを叩きつける課長が居た。

「・・・ちよお・・・。」

あたしの小さな声に反応して課長は体をビクリと揺らし、こちらを見た。

あたしを確認して課長はデスクに両手をついて体を起こした。

「飯橋・・・。」

課長の呼吸は浅くて普段の冷静さを欠いているのが見て取れた。

あたしは、課長はきつとこんな姿見られなくなかったんだろうと慌てて取り繕う。

「あ、の洗い物して・・・て・・・も、もう帰りますね？」

コップは明日洗えば良い。あたしは給湯室の電気を消そうとする。
ところが

「俺も直ぐ出るから。」

と、床に投げつけられたビジネスバッグを拾い上げる課長。

あたしが給湯室の中でどうしたら良いか考えあぐねている間にも課長は、バッグの中から封筒を取り出し、中をチラッと確認して引き出しに仕舞う。

それから机の上の書類に一度手を掛け、ただ立ち尽くすあたしの方を見た。

「・・・。」

目が凄く冷たくて、あたしは怖くなって、蛇口を捻る。

水音に掻き消される課長の存在。

あたしはスポンジを手にとって自分のコップを丁寧に洗った。

課長が2課を出て行くまでの間、給湯室に収まっていた方が良かったしは判断した。

程無くして水を止めて、室内に目を向ける。

其処に居た筈の課長の姿は無く、あたしはホッとして給湯室の電気を消した。

デスクに戻って、時を止めた時計をミニバッグの中に入れる。

更衣室に向かう為にエレベーターに足を進めると、未来クンのデスクの下辺りに封筒を見つけた。

取引先の名前が印刷された緑色の封筒だった。

さっき、課長がバッグを拾い上げていた・・・その時に落ちてしまったものなのだろう。

もしかして必要なものじゃないのかな・・・。

あたしは、未だ会社の近くを歩いているかもしれない課長を追って1階に下りた。

【17】

会社を離れて駅に向かう俺は締めていたネクタイを緩めて息を吐いた。

又、変な所を飯橋に見られたもんだ・・・。
まあそのお陰で気持ち少し落ち着いた。

さっきまでの俺は気が立っていた。

数時間前、1課の小野寺と得意先で鉢合わせしたのが事の始まりだった。

俺が1課に居た頃、懇意にしてくれていた君嶋さんが9月で異動になると聞いて挨拶に行った。

そしたら丁度小野寺と、部下の坪井が納品に訪れたのだ。

「何だ、2課長の渡部じゃないか。」

「・・・どうも。」

以前は俺の部下であった筈の坪井は小野寺の腰巾着にでもなったのか、俺を軽視しちよっとだけ頭を下げた。

君嶋さんは、俺の人事の経緯を知ってる人、と言うか俺は君嶋さんからの発注を事務員へ伝達し忘れたのだ。

なのに「きちんとメールで発注すれば良かった」と俺に頭を下げてくれた人だった。

小野寺はあの時の事を蒸し返すようにわざと大きな声で頭を下げた。
「本当にあの時は申し訳ございませんでしたっ、君嶋さん!!」

「いや、小野寺さん、もうそれは済んだ事ですし、渡部君も翌々日には半納してくれましたし。」

「いやいやいやいや、完全なる渡部の失態ですので!!」

胸糞悪い笑いさえも浮かべて小野寺は俺を足蹴にした。

小野寺達が去った後、君嶋さんは「君も大変だな」と労ってくれたけど、俺はそれだけでは収まりきれない苛々とした火種を燻らせていた。

飯橋が「どうしたんですか」なんて言う様な奴でなくて良かった。
そんな事を言われれば一触即発だったろうな。

「課長！」

聞き覚えのある声に俺は振り返る。

「飯橋？」

彼女は制服に身を包んだまま夜の街中に居た。

「これ、落ちてました。必要なものかと思ってお持ちしたんですけど。」

目の前に差し出された緑色の封筒は、持ち帰って精査しようと思っていた書類だった。

「ああ・・・悪い。助かった。」

俺のその一言に飯橋は笑顔で

「良かった、間に合って。」
と言った。

バーテンダーの庄司君がショットグラスを用意しながら気さくに声を掛けて来た。

「たまにしか来ないのに良く顔を覚えてるな、君は。」

「二度以上御来店頂いてるお客様の顔は大抵、覚えてます。」
黒のセルフレームの中の庄司君の目が細められる。

目の前に差し出されたカクテルのグラスを手にとるとカランと氷が鳴った。

何故だろう、さっきからずっと同じ風景が思い出される。

”良かった、間に合って” そう言って笑った飯橋の顔。

「何か良い事ありました？ 何だか顔が綻んでますよ。」

庄司君がグラスを拭きながらこちらを見ていた。

綻んでる？

飯橋を、想って？

俺はそれを自重する様にグラスに口をつけた。そろそろと体内へ流し込まれるアルコール。

飯橋は、八神の女。

飯橋は、昔の男を想い続ける女。

もう俺は、色恋沙汰に振り回されるなんて、まっぴらな筈だっただろう？

人のモノに手を出すなんて・・・有り得ない。

グラスを大きく傾け、ゴクリと酒を煽る。

店名が印刷されたコースターの上にグラスを置いた。

忘れない涼香との恋愛、結婚、離婚。

”忘れない”と”忘れられない”は、同等だろうか。

【18】

暑い夏も終わりを迎えようとしていた。夕方には、幾分涼しい風が吹き込んでくる。

「最後にビアガーデン行きましょうよ！」

守屋が主任に縋る様に呑みに誘う。俺はそれを耳にして苦笑いする。何だか、それは当たり前の光景で、俺は2課に居る事の心地良さを覚えてしまった。

「課長、版下今日クラツツさんから上がってきます。」

「ああ。悪いけどそれチェックしておいて。」

「はい！」

飯橋は嬉しそうに笑う。

よっぽど仕事が好きなのだろう。

「課長、今夜行きませんか？」

「行かねー、お前とは行かないって決めてる。」

「なんスか、それっっ!!」

最近、八神も飯橋さんとぼっかで付き合いいいっっ。

守屋がそう言うと、飯橋は小さくなって顔を赤らめる。

・・・うまく行ってるんだな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

帰社後にやるべき事を頭の中で整理していると、ジャケットの内ポケットで携帯が震えるのを感じた。

携帯の画面を凝視する。

電話帳から削除した筈の番号の羅列を見て、それが誰からのコールなのか判ってしまう自分が嫌だった。

出なければ良いのに。

無視を決め込む事が出来ない自分が女々しくて仕方無い。

「もしもし。」

『もしもし、理人^{りひと}・・・あたし、涼香。』

「・・・ああ。」

変わってない。

”理人”と呼ぶ、彼女の声。

『仕事中だね?・・・ちょっとだけ良いかな。』

俺は、駅構内から足早に外に出た。家路に急ぐ人の波とは逆に歩を進める。

「・・・どうした?」

『うん・・・あのね、あたし、理人から借りてた本があって、それどうしたら良いかなって。』

・・・そんな事で電話してきたのか。

『理人?』

「・・・捨てて？ 返されても困る。」

『でも、これ理人が。』

彼女が未だ何かを言おうとしているのを俺は遮った。

「涼香。俺の番号、携帯から消せ。もう掛けてくるな。」

お前から俺を切ったんだぞ？

『理人、未だ怒ってる？』

俺は頭を振った。

「涼香。」

『・・・あたし。あのね。』

「課長？」

携帯電話の中の涼香に集中していた筈なのに、俺を呼ぶその声に神経が持って行かれる。

顔を向けると飯橋が私服姿で立っていた。

「あっ。」

俺が電話中だった事に気付いて飯橋は口を手で覆い、申し訳なさそうな顔をする。

そして数回頭を下げ、俺の前から立ち去ろうとした。

「切るぞ。」

涼香の返事も聞かないまま携帯を閉じ、俺は改札へ向かう飯橋の腕を取った。

飯橋に振り返る間も与えず、俺はＩＣカードを改札機へ翳し、彼女もそれに倣わせる。

「か、課長?!」

各停と快速が乗り入れる錦糸町駅。

俺は行く宛ても無いのに、快速のホームに昇るエスカレーターに乗り彼女を見下ろす。

彼女の顔には戸惑いが浮かんでいる。

彼女が帰ってしまったくない様に俺は掴んだその手を放さない。

時折、引っ込めようとして力が籠められたが俺はその度それを握り返す事で阻止した。

上りの快速は未だ混雑しておらず、俺は進行方向一番前の車両のボックス席に飯橋と隣り合わせに座る。

逃げられない様に彼女を窓際に押し込む形で座った。

そこで初めて俺は彼女の腕を解いた。

「・・・課長？ あのこと・・・」

何処へ行くのか、何故連れて行かれるのか、聞きたい事があるのは承知だったが俺は答えなかった。

答えられなかった、と言うのが正しい。

行く宛ては無い。

何故、飯橋を連れて来てしまったのかも、解らない。

ただ一つ言えるとしたら、傍に居て欲しかった。

飯橋に傍に居て欲しかった。

俺が答えないので飯橋は口を噤んだ。

ただ黙って窓の外の景色を見ていた。窓ガラスに映る彼女の瞳は、落ち着いて見えた。

そんな飯橋を見ていたら、ガラスの中で彼女と目が合った。

飯橋はゆっくりと目を伏せ唇の端を少しだけ上げる。

”解ってる”って、そんな風に言われた気がした。

何を言った訳でも無いのに、俺の何を知ってる訳でも無いのに。

いや、俺は・・・飯橋に理解して貰いたいと願っている。

【19】

東京を越え、神奈川に突入した快速電車。そろそろ俺も土地勘の無い場所だ。

「降りよう。」

俺は、横浜駅のホームに降り立った。

「突然、悪かったな。」

「・・・あ・・・いえ。」

「・・・。」

さて、どうしたもんかな。

ホームにアナウンスが流れた。間もなく上りの電車がやってくる。

俺は今降りたホームの端から反対側へと歩き始めた。

「課長？」

「え。」

振り返ると飯橋が大そう不思議そうな顔をしている。

「何処に行く所があったんじゃないんですか？」

「・・・ないけど。」

「ない？」

「ああ・・・宛ては無かった。」

俺が正直にそう言うのと飯橋はケラケラと笑い出した。

ホームには会社帰りの人間で溢れていて、それらの視線を受けているにも関わらず飯橋は堪えもせず笑っている。

「何でそんなに笑ってる?!」

俺の方は注目を浴びている事に恥ずかしくなって小声になる。

「だ、だって、課長がそんな事するなんて!!」

「はぁ？」

「行き当たりばったりの課長なんて想像もした事無いです。」

「はぁ？ 俺はこんなもんだぞ。」

飯橋の笑いが段々と落ち着いてくる。笑いから零れた涙を指の腹で拭う彼女。

・・・こんな風にも笑うんだな。

何時も控えめでいる彼女しか知らなかった。

「あはは・・・ふうお腹痛い、笑い過ぎました。」

電車がホームに滑り込み、俺達はそれに乗り込む。

同じ様にボックス席だったが、今度は俺は飯橋に向かい合う様に腰を下ろした。

「・・・お前の中の俺って、どんな奴だ？」

未だ顔を緩ませる飯橋に聞いてみる。

「あたしだけじゃないですよ？ 三代川さんも佐藤さんも、課長は真面目を絵に書いた様な人って。」

「・・・不真面目じゃあないが、案外ズボラだ。」

正直に言うとな飯橋は又、笑う。

「ズボラって。」

何だか良いな、って俺は思った。

こんな風に笑ってる飯橋が良いなって思った。

八神と二人つきりならこんな風に笑っているんだろうか。

「もう明日、筋肉痛になりそうです。こ、こんなに笑ったの久し振り。」

それを聞いて不覚にも俺は嬉しくなってしまった。

・・・こういう感情を俺は知っている。

未だ、俺もそれを持っていたのか。

「ついでにと言っちゃ何だけど、夕飯付き合ってくれないか。」

俺は、飯橋に特別な感情を抱いているようだ。

「あ、はい。そう言えばお腹空きました。」

彼女が片手を腹部に当てて思い出したように言った。

錦糸町駅迄戻るのを避け、東京駅で降りた。

社内の人間、特に八神に遭遇する訳にはいかないと思ったからだっ
た。

「何か食べたいものあるか？」

「あ・・・いえ、特に。課長は？」

「食えれば何でも良い。」

「ぶっ。ほんと、案外ズボラ。」

俺の半歩後ろ歩く飯橋は又笑っている。

思わず俺も口元が緩む。

彼女の提案で駅構内にある蕎麦屋に入った。

「蕎麦で良かったのか？」

「あ、はい。課長こそ、良かったですか？」

「俺は良いんだ。」

”食えれば”？」

彼女は手を口元に当てながらクスクスと笑む。

駅構内の蕎麦屋なんてサラリーマンが殆どで彼女の様な女性は珍しい。

向かい合わせの席に着き、彼女が蕎麦を箸でつまみ上げた時にブブブと振動音が聞こえて来た。

彼女はそれに気付き、一度俺を見た。

”携帯を見て良いか”と尋ねているのだ。

・・・恐らくその携帯を震わせているのは、八神に違いない。

応えて欲しくない。

今は俺とお前の時間な筈だと嫉妬心が湧いてくる。

”どうぞ”と一言言えば良いのに、俺はその着信を拒否して欲しくて、気付かない振りをし目を伏せた。

そして蕎麦を啜った。

彼女は、バッグの中に手を入れ、その振動を止めた。

そして、箸を持ち食べ始めた。

「あたし、うどんより蕎麦が好きです。」

持て余した雰囲気繕う様に嗜好を吐露する。

詰まらない嫉妬で彼女に気を遣わせた事に申し訳ないなんて気持ち

は微塵も無かった。

どちらかと言えば、彼女が俺を気遣ってくれた事の方が重要で嬉しかった。

俺は飯橋を独占したい気持ちでいっぱいだった。

突然、課長に手を引かれ横浜まで、そして東京へと舞い戻って来た。東京駅で一緒にお蕎麦を食べた後、課長は又「悪かったな」と言っ
て別の電車に乗って行ってしまった。

自宅に帰る為に乗り込んだ快速電車。19時を過ぎていたけど始発
だったから、あたしは空席を見つけて座る事が出来た。
そして開いてみる携帯電話。

課長との食事中に着信したのは、やっぱり未来クンからのメールだ
った。

残業終わったー。これから帰るけど、アズはもう家に着いちゃ
った？

もし未だ錦糸町に居たら呑みに行かないかなと思って、メール
した。

着信時間は今から30分も前のものだった。

もし友達だったら、「ごめんね」と簡単に口にして携帯を確認した
のだけれど、相手は課長、上司だ。

だから窺うような目を向けたのだけれど、課長は直ぐに目を逸らし
てしまった。

やっぱり真面目な人だから、食事中に携帯なんてマナー違反だと感
じたんだろう。

未来クン宛てにメッセを作成する。

・・・課長と一緒に居ました、なんて書けない。

この前の苛々とした課長の事も未来クンには話してない。きっと今日の課長も、何時もの課長じゃなかった。

あたしが錦糸町駅で声を掛けた時に誰かと電話中だった課長。

その電話の相手に放った「切るぞ」という言葉。凄く短くて冷たい口調だったのを覚えてる。

話したくない相手だったのかも。

だから、気持ちを落ちつけようとして電車に飛び乗った？ あたしはそう思っていた。

見られたくない自分だった筈。

だとしたら、あたしの口から課長の事を未来クンに話す事は出来ない。

地下鉄に乗っててメール気付くの遅くなりました。

今日は前に話した事のある優香とちょこっと会ってたよ。今、錦糸町で乗り換え。

未来クンは、帰った？

快速のホームから各駅のホームへと移動する間に送信するメール。2分程で、携帯が鳴った。

「もしもし、未来クン？」

『お疲れ。今、未だ錦糸町でしょ？ 良かったら俺のうちに来ない？』

「え……。」

『あ、今、俺風呂から上がってビール飲み始めたところでさ。』

『そうなんだ……ううん、帰ろうかな。明日、予定通りで……。』

『・・・アズ。明日、うちに泊まっていつて?』

きた。

とうとう、きてしまった、この日が。

「・・・うん。お、お邪魔するね?」

携帯をバッグに適当に放り込んで、あたしは電車を待つ。

未来クンと二人で会う様になって、半年近くになる。未来クンはあたしを本当に大切にしてくれてる。

手を繋いで、キスをして、身体を少しだけ抱き締める。

未来クンはそれ以上を求めてこなかった。

何時までもそれで過ごしていくなんて不可能なのに、あたしは未来クンの優しさに包まれるだけ包まれて安住の地に辿り着いた気になっていた。

恋人同士なのに、セックス無しなんて、有り得ない・・・よね。

でも、あたしは未だ何処かで待っている。

慶太クンを待っている。何処かで。

そんな気持ちを持ったまま、未来クンと身体を繋げるなんて出来ない。

慶太クンがあたしを抱き締めた時に、”綺麗”でいたいのだ。

未来クンは好きだ、大切な人だ。

母も、あたしの精神状態が安定している事で安心しているのだ。父親は相変わらず、仕事だと不在が多い。それが本当なのかどうかは判らない。

干渉し合わない、楽と言えば楽な家庭。仮面の家族だ。
あたしは、愛に飢えていた。

その愛を教えてくれたのが、慶太くんだった。

だからあたしには今も、愛が枯渇している。

【21】

未来クンと大型のショッピングモールに行く約束で、お互いの家の最寄りの駅で待ち合わせる。

「荷物、貸して。」

会って早々、未来クンはあたしの何時ものバッグよりも膨らんだそれを手に取った。

あたしはそれが気恥かしく、居た堪れない気持ちにさせられた。

「秋物、もう買った？」

「ううん、未だ。あたしお洒落とかメイクとか凄く疎くて。」

謙遜でも無くそれは本当の事だった。派手な物は好んでいなかったからベーシックな格好が多かった。

それに比べて未来クンはお洒落が好きみたいで、毎週末こうして会っていても同じ服を見た事が無かった。コーディネートが上手いからそう見えるだけなのかもしれないが。

電車を乗り継いで、モールに着く。午前中なせいか未だ人も疎らだった。

9月も下旬でディスプレイは、すっかり秋か冬を思わせるもので、販売員の人は既にブーティで足元を飾っている。

「あたしも何か気に入ったのあったら買おうかな。」

「うん、良いんじゃない？ あ、俺見たい店こっち。」

未来クンに手を引かれ、あたしは南館と示された方へ歩いて行く。

・・・そう言えば、未来クンは、きっちりと予定を決めている事が多い。

行きたいお店は此処。ランチは此処。その次は此処、と言う感じだろうか。

あたしは、ぷらぷら歩いて目に留まったものへ惹かれて其処へ、と言う事の方が多い。何かをかつちりと決めると言う事が苦手なのだ。特に誰かと一緒の場合は、相手の意見に身を任せていた方が楽で良い。

・・・課長はどうだろう？

もし課長と出掛けると、適当に歩いて立ち止まって、適当にご飯を食べたりするのだろうか。

楽そうだけれど主張性が無く、逆に戸惑ってしまいそうだ。

「あ、何？ 思い出し笑い？」

未来クンがあたしの顔を覗き込み、微笑している。

あたしは慌てて「なんでもないの」と顔を伏せた。

「ねえこのレザージャケットどう？」

未来クンが手に取ったのはキャメル色のジャケットだった。とっても似合いそう。

「うん、素敵。」

「そお？」

未来クンは嬉しそうに、他の服も手に取りデザインを確かめたりしている。

あたしも、反対側に置いてあるレディースを見してみる。どれもこれも可愛い、けれど、あたしのテイストでは無いかなあとと思うと、ハングーをわざわざポールから外し鏡の前で当てて見る、なんて事はない。

あたしは未来クンが居る場所へと戻っていき、カットソーや羽織り物に触れていく。

未来クンが好みそうなライトブルーのTシャツの横に、ライラックのTシャツがディスプレイされていた。

課長に、似合いそう。

「アズ、レジ行ってくんね？」

「あ、うん。」

未来クンの腕には数枚の洋服が掛けられていた。

反対側の雑貨屋さんが気になってあたしはそちらに歩いて行く。24にもなるのに、クマのぬいぐるみに頬が緩む。

クマを模ったブックマーカーが目についた。

最近、嵌っている作家の本を何冊も古本屋で買ったのだ。それ用にどうだろうと、あたしはマーカーを手にとって見る。ピンクのマーカーとブラックのマーカーどちらも捨て難く、二つ持ってレジに並ぶ。

あたしはどうも未来クンの様に”こう”と決められないんだわ。

苦笑いしながら向かいの店を見ると未来クンが丁度、買い物袋を提げてあたしを探していた。

「あ、ごめんね。今、買ってきちゃった。」

「何買ったの。」

「うん、ブックマーカー。」

同い年なのに子供みたいに思われるのが恥ずかしくて、”クマの”とは言えなかった。

「何読むの？ 恋愛小説？ 俺は活字全然駄目なんだけどね。」

「最近、映画になった推理小説なの。ミーハーでしょ。」

「ええそういう奴多いでしょ。あ、次あっち行こう？」

差し出された手を取ってあたしは未来クンと歩き出す。

大きなモールを歩き回って、ぺったんこ靴を履いていても疲れてしまった。

休憩の出来るベンチに座り、あたしは息を吐いた。

「疲れた？」

「うん、ちよっと。午後はいっぱい人も居たね。」

「人酔いとかしちゃってた？ ごめん、俺気付かないで。」

未来クンの申し訳なさそうな顔にあたしは胸元で手を振った。

「全然全然、大丈夫。」

その時だった。未来クンの携帯が着信音を奏で始める。

未来クンは肩から斜めに掛けたバッグの中からそれを取り出し「課長からだ」と言った。

「もしもし。あ、お疲れ様です。」

話が進む内に未来クンの顔が険しくなり始めた。一体どうしたのだろう。

「申し訳ありません、はい、はい。・・・ええ、じゃあ自分、今から行きます。一時間も」

かからないで行けると思いますんで。」

と電話を切った。

「ごめん、アズ、俺ちよっと会社行ってくるわ。」

【22】

あたしは今、未来クンのおうちに向かう為に一人電車で揺られている。

月曜の朝に、1課2課合同の営業会議が開かれる。その為、各営業マンから月次報告書やらの提出が必要不可欠だった。

それを金曜中に提出しておくべきだったのだけれど、未来クンは年間予定表を失念していたらしい。

課長は休日返上で会社に出勤し、報告書のまとめをやっている。未来クンは行かない訳にはいなかった。

トートバッグと未来クンが買ったばかりの洋服が入った紙袋、持ち手を握り直してあたしは改札を通り抜けた。何時もの駅なのに向かう方向が違うだけで、何だかドキドキした。

預った部屋のキーを差し込み回す。ガチャリと音がして、未来クンの部屋のドアは開いた。

「お邪魔します・・・。」

明りの無い部屋は暗く、カーテンの向こうに薄らと外灯が見えた。

”施錠はする様に”

未来クンに言われた事を思い出し、あたしはドアにロックを掛けた。敲きで靴を脱いだ所で壁に備え付けられたキーフック、其処に掛けようとして、あたしは重大な事に気が付いた。

”施錠”を言い付けられた。未来クンはどうやってこの家に入るのだろう。鍵はもう一本有るのだろうか。じゃああたしが今手にしている鍵は何なんだろう？

・・・合鍵、なんだ。

赤いレーザーストラップの付いたこの鍵は、あたしの為に用意された鍵なんだ。・・・未来クンの心遣い。あたしに無理をさせないでちよつとずつ歩み寄ってくれた未来クン。

あたしは電灯のスイッチをオンにして、思わず部屋をぐるりと見回した。

あたしは此処に溶け込んでいけるんだろうか。未来クンと一つになれるんだろうか。

テレビの前のカウチにバッグと紙袋を置く。あたしは台所に立った。仕事をして帰ってくる未来クンの為に何かを作ろうと冷蔵庫を開ける。玉葱や人参、卵、豆腐・・・男の人にしては食材が揃っている。彼の人柄を思い浮かべてあたしは、優しい気持ちになった。豆腐のお味噌汁と炒飯を作って彼の帰りを待つ事にした。

夕飯の準備が済んでしまうと、手持無沙汰になりテレビでも見ようかとリモコンを探す。テレビの前のローテーブルにも無く、テレビの傍にも無い。「うーん」と唸って、あたしはカウチの下も覗いてみる。勿論有る訳もなく、失笑する。

「ん？」

でも何かある。カウチの下に手を伸ばし、その何かを手を取った。それは、一本の煙草だった。

慶太クンと同じ銘柄の煙草。

そして、あたしは気付いた。彼と課長の歓迎会の時、隣に座った未来クンは煙草を取り出し「吸って良いか？」と尋ねてきたではないか。それから、あたしは彼が煙草を手に行っている姿を見た事が無かった。・・・未来クンの、氣遣い。

あたしに、慶太クンを思い出させない為の心遣い・・・。

あたしは、無理をさせてる、未来クンに嗜好品さえ我慢させている。

ラグの上に座り込む。

本当に良いのだろうか、これだけ愛されていて良いのだろうか。

手にしていた煙草の皺を少し伸ばして、あたしはそれをカウチの下に放り込んだ。

きっと大丈夫。同じ煙草を見ても、今は普通に息してられる。頭の中で慶太クンが暴走しない。

応えよう。彼の気持ちに応えよう。

じわりと滲む涙を指で拭い取る。あたしはトートバッグを引き寄せ、着替えやメイク道具のポーチを取り出す。洗面所でメイクを落とし洗顔もすると気持ち少しさっぱりとした。直ぐ傍にあるお風呂場を覗く。流石に主の留守中に勝手にお風呂に入るのは拙いだろうとあたしは動きやすい恰好に着替えを済ませ、カウチに身を寄せる。

リモコンの見当たらないテレビは諦め、あたしは読み掛けの文庫本を開いた。最初から挟まっていた紙の葉を裏表紙の方へと仕舞い込み、さっき買ったばかりのクマのブックマーカ―を用意する。未だ読み始めたばかりの推理小説は厚さ4センチ程の長編で、これを読んでいる内に未来クンも帰ってくるだろうと思っていた。

しかし、小説が中盤を超えてもメールの一つも無く、流石に事故にでも遭ったのではないかと不安が擡げた。あたしは携帯を開き、彼にメールを送信する。程無くして返信が届く。

仕事は終わったんだけど、課長とちょっと一杯飲んでます。ごめん。

「・・・一杯？」

課長は下戸の筈、どうして又・・・。時間は20時半を回っていた。少しお腹も空いてきた。テーブルの上のすっかり冷めてしまった炒飯に目をやる。せっかく作ったのだから一緒に食べたい・・・あたしはもう一度、小説を手を取った。

そして、あたしは何時しか眠ってしまった。

【23】

「ん……。」

何となく感じた熱に目を覚ます。気付くと、ベッドの上に居る様だった。目の前に何かが在って、暫く考えてみる。

（あ……此処、未来クンのうち……）

自分の場所が明らかになると、ではこの腰の辺りの熱は未来クンの腕で、おでこに掛かる吐息は未来クンのものだと思いが理解し始めた。この状況下にあたしは急に照れくさくなり、ゆっくりと未来クンから離れようと身体を動かす。

「……ちよつとだけ。」

未来クンの少しだけ掠れた声が頭の上で聞こえてくると同時に、彼の手があたしの腰を引き寄せる。その強さで、彼は寝ぼけているのではなく起きているのだと解る。恥ずかしくて恥ずかしくて彼の胸に顔を埋めると、瞬く間に彼の下へと組敷かれていた。声を掛けると間もなく唇を塞がれる。そして、彼の手があたしの胸をやわやわと撫でた。

「んっ。」

どうして、こんな事に……。頭が、気持ちがいまいけない。未来クンは唇を首筋、鎖骨へと下ろしていく。

「みらっ……。」

止めて欲しいと言う懇願の気持ちを込めて彼の名を呼ぼうとすると「ちよつとだけだから。」

と切なげな声が聞こえてくる。

そして、あたしは昨夜の思考へと引き戻された。

応えようって、応えられる筈だと思って。だったら……。拒む事

なんて、出来ない。

薄い布一枚に覆われたあたしの身体に、意志のある指が触れる。もう何年も知らなかった感覚が呼び覚まされる。襟ぐりを引き下げられると未来クンは其処を強く吸った。未来クンのさらさらの髪からシャンプーの匂いがする。香水ではない彼の香りが、此処は特別な場所なのだと言う事を知らせているみたいだった。

彼の動きが其処で止まった。

「・・・ごめん・・・。」

そう言い未来クンがあたしから身体を放し、ベッドから抜け出た。彼が大きく息を吐く音が聞こえて、あたしも上体を起こした。

「未来クン・・・。」

寝室のドアを開けかけて、あたしを振り返る未来クンの顔は笑った顔を張り付けていた、という表現が一番しっくりする気がした。

「・・・未来クン。」

あたしはもう一度彼の名を呼ぶ。

「・・・ごめん、ちょっと焦って・・・ごめん。」

何度も彼があたしに謝る。どうして？ あたしの方が謝らなきゃいけない事沢山有るんだよ？

未来クンは寝室のドアを半開きにしたまま、キッチンへと向かった様子だった。薬缶にお水が注がれてガス台に置かれると、カチカチと音がする。あたしはきつとボサボサであろう髪を撫でつけてベッドから静かに降りた。

あたしが寝室から出てきた所に未来クンが「おはよう」と笑顔で応える。何時もの、未来クンらしい優しい顔だった。さっきの事にはもう触れない方が良くのかもしれないとあたしは判断した。

「おはよ・・・昨日、遅かったの？ あたし寝ちゃって・・・。」

「ん？ ん、23時は過ぎてた。課長が・・・うん、ちょっと酔ってて。」

「あ、そうなんだ・・・課長、下戸なのに飲んだりするんだね？」

「カフェオレ、かな？　アズ。」

「あ、うん。」

未来クンはインスタントコーヒーの瓶をカップに振り、後ろに振り返り小さめの冷蔵庫から牛乳を取り出した。あ・・・そう言えば炒飯・・・。

「炒飯、今日のお昼に食べる？　ラップして仕舞っちゃった。」

「あ、うん、そうしよう？」

あたしも何か朝食のお手伝いをしようと彼の傍に立つ。

「トーストで良い？　俺あんまり朝、食べないの。」

「うん、構わないけど・・・。」

お湯が沸いてカップに注がれるとコーヒーの香りが鼻腔をくすぐる。あたしは急に空腹を覚えた。昨夜は何も食べてなかったんだ・・・。トーストだけで足りるかな、なんて考えていたら急に彼に抱きすくめられた。

「今日はずっと二人で此処に居よう？」

「・・・え、あ、ん・・・。」

込められた力に、違和感を覚える。

未来クン、一体どうしたんだろう・・・あたしをこんな風に力任せに抱き締めた事なんて無かったのに。

その日、彼の言葉通り、未来クンの部屋で夕方迄過ごした。テレビゲーム初体験のあたしに優しく手解きをしてくれ、ランチは昨夜の炒飯をレンジで温めて、午後は彼が良く聴く洋楽をバックに会社の事だったり、友達の事だったりとお喋りを興じた。

彼が一人用のカウチに座り、あたしはL字の配置で置かれた二人掛けのカウチに座っていた。暫し沈黙が流れた時、未来クンがあたしを見つめる。

「アズは・・・俺の事、好き？」

心臓が大きな音を立てた気がした。未来クンにあたしは気持ちを伝えた事は無い、そして彼からもそう望まれた事は無い。

「どうしたの・・・。」

「・・・やっぱり答えられない？」

やっぱりって・・・どうして急に・・・。

言葉に窮していると未来クンは顔を伏せ、渴いた笑いを漏らした。

「ははは、ごめん、何俺急に・・・。ごめん、今の無し。」

情緒不安定になっているとしか思えない未来クンの傍に歩み寄る。

あたしは傳いて彼の手に触れ、顔を見上げた。

「・・・今のあたしにとって未来クンは無くてはならない人、だよ？」

弱弱しい眼をした未来クンが居る。何時もの未来クンでない事は確かだった。何が有ったと言うのだろう。

「未来クン、何か有った？」

「・・・。」

彼は答える代わりにあたしを抱き締めた。今度は、息が出来る程の何時もの抱き締め方。

「・・・もお大丈夫。」

耳元で聞こえる未来クンの、その言葉。

未来クン？

【24】

八神から提出された資料が不足していた事で、休日なのに悪いと思
いながらも俺は奴に電話をした。電話の向こうに何かの館内放送が
流れていた。出先だったのだと思いつながらも、資料を催促する。も
しパソコンの中に入っているのなら俺が出力すれば良いだけの話だ。
けれど、八神はすっかり失念していたらしく作業も進んでいない様
だった。

『今から行きます』と八神は電話を切った。

「課長、すみませんでした。」

ラフな格好をしている八神はその甘い顔からして大学生に見えなく
もなかった。

「いや、こっちこそ悪いな。」

「いえ、俺のせいですから。」

そう言い、立ち上げたパソコンを操作し始めた顔は真剣そのもの。
俺の方とは言えば、後は八神からの予定表を打ち込むだけの状態だ
ったので一息吐こうと立ち上がり給湯室の扉を開けた。薬缶に少量
の水を注ぎ、火に掛ける。

「八神もコーヒー飲むか？」

俺は少し声を張り、事務所の八神に尋ねる。

「え、あ、すみませんっ。課長にそんな事っ。」

それぞれのカップが仕舞われた戸棚の硝子戸を引き、適当にカップ
を出した。俺専用のインスタントコーヒーを一さじ掬う。

「あ、それ俺んじゃないっス。」

給湯室の入口に八神が立っていて、俺が粉を入れたコーヒークップを指差した。

「え？ 別に誰のでも良いだろ？」

「課長って案外そういうの気にしないんですね。あ、それアズのだ。じゃあそのまんまで。」

そう言う八神の顔は完全に緩みきっていた。嬉しくて嬉しくて仕方ないって顔だ。

「・・・上手くいってるみたいだな？」

「はい。まあ・・・ゆっくりと。実はさっき迄アズと一緒に。」
その時、薬缶が沸騰を知らせるけたたましい音を鳴らす。

「八神、悪いんだけどその予定表が終わったら、ちょっと手伝って欲しい仕事があるんだ。」

八神が”断れない”のを承知で俺は仕事を振った。

「雑用なんだけどな、あ、時間大丈夫か？」

「え・・・ああ・・・ハイ、大丈夫です。」

今の返答で八神が飯橋を待たせているのは歴然だった。けれどもう仕掛けてしまったのだから撤回はしない。

”子供染みている”と言われても仕方が無い事だ・・・飯橋のカップに口を付けて満足そうにしてる八神に、これ位の意地悪をしたって罰は当たらないだろう？

八神から予定表を受け取ると、溜まっていた雑用を八神に指示し、自分は会議資料の仕上げに掛かった。俺は20分足らずで終わったのだが、八神は未だ俺の雑用と戦っていた。雑用、過去のデータの打ち込みやらファイリングやら、今で無くても良いものの塊だった。俺はパソコンのディスプレイ越しに八神の様子を窺っていた。時間は、19時を回っている。

電話機が外部からの訪問を聞きなれない音で知らせた。休日だと云うのに来客と云うのもおかしな話だが、無視する訳にもいかない。手の空いていた俺は受話器を上げた。

「何時もお世話になってます、トッピーライナーですが、お届け物なんですが上に上がらせて頂いても

宜しいですか？」

「ああじゃあ、4階にお願いします。」

俺は受話器を置き、こちらを見ている八神に「宅急便だ」と告げた。

俺は届けられた荷物に受領印を押す。宛名は……。営業一課 渡部理人様となっていた。差出人は、伊藤涼香だった。俺は自嘲気味に薄く笑う。涼香は俺が今でも一課に所属していると思ってるのだ。二年と云う月日で、状況は変化していると言うのに……。

自席に戻り封を切ると、何時ぞや電話をしてきた時の話題になった『本』が其処には在った。

「課長宛の荷物だったんスカ？ 凄い偶然っスね！」

「……別れたかみさんから、返却物だよ。」

「え。」

八神が言葉を失った。

確かこの本はかなり好きで、普段本を読まない涼香にも面白い事を共感して欲しくて読むよう勧めた本だ。表紙に指を滑らせ、本の中身を少しだけ思い返す。

「八神、俺の方は終わったからお前もその辺で良い。助かったよ、共有サーバーに落として？」

俺はその本をデスクの中に仕舞い込む。送り状が貼られたまんまの紙袋はぐしゃぐしゃにしてゴミ箱に押し込んだ。わざわざ涼香は現

住所と電話番号を明記していた。もしかして、俺からの連絡を待っているのかもしれないと思う。

「ああハイ・・・すみません、全部終わらなくて・・・。」

「いや、俺としては手付かずのモノだったから凄く助かるよ。」

「今、バックアップしました。」

「ああ・・・八神、飯でもどうだ？」

「え？」

八神は驚いた顔をしながら腕に嵌めた時計に視線を落とす。

飯橋が待っているからか、八神は先程から何回も時間を気にしていた。

「・・・たまには付き合えよ。」

正直断られても良いと思っていたが、この妙な荷物の事が些か気になるのか八神は「はい」と少し堅い表情で答えた。

【25】

昼は定食屋、夜は居酒屋をやっている錦糸町駅と会社の丁度中間にある店にやってきた。1課の頃、やもめ暮らしの俺の腹を満たしてくれていたのがこの店だった。

カウンター席が十にも満たなくて、テーブル席が五つ程のこじんまりとした店で、俺達は空いていたテーブルに腰を下ろした。

「好きなだけ食え。」

「・・・あ、ハイ。」

「大将、ビール1本。」

「あいよお。」

カウンターの向こうにいたねじり鉢巻きの大将が威勢良く答える。視線を八神に戻すと、店内の壁に掛けられた時計に目を向けていた。それに気付かない振りをするなんて簡単な事だった。

「仕事はどうだ。新年になったら一人で廻って貰おうと思ってるんだけど。」

「はいよ、ビール!」

瓶ビールと小さなグラスが二つ、テーブルに置かれた。俺はビールを手に取り、八神に向かって傾ける。八神は恐縮してグラスに手を伸ばした。

「仕事は、大分慣れました。・・・先輩も優しい方が多いのでのびのびやらせて貰ってます。」

「そうか。ま、2課の良い所でもあり悪い所でもあるな。」

八神のグラスがいっぱいになると俺は自分のグラスにもビールを注ぐ。八神の視線に気づき、顔を上げると

「課長も飲むんですか?」

と聞かれた。

「この前みたいに醜態は晒さないから安心しろよ。」

苦笑いしながら俺はグラスを少し持ち上げた。倣う様に八神もグラ

スを持ち、それから口に運ぶ。

「此処、刺身美味いぞ。あとは煮物とか。」

俺が左横の壁を見上げると八神もそれを見る。

「あ、俺もつ煮、好きなんスよね。」

「大将、注文良い？」

俺達は適当に食べ物有三品程頼み、仕事の話をした。どうやら、八神も2課は温いと感じているのが口調の端々に見て取れた。若いか
らこそ、上を見たいと思うものなんだろう。・・・守屋は例外か？
程良く八神の緊張が解けた辺りで、俺は「彼女」の事を切り出した。

「・・・飯橋はさ、あれから発作みたいなの出るのか？」

「え？ ああ・・・出てないっスね。何ですか？」

「・・・昔の男が忘れられないって言ってただろ・・・実を言うと
俺も別れたかみさんが頭から離れない。」

俺は少し、言葉を変換した。

正しくは、俺は涼香を『忘れない』んだ。忘れられない、では無い。
辛かったあの日々を頭から消し去ってしまいたい。出逢った事を否
定したい訳じゃない、だけど、あの別れは忘れない。

「バツイチだって話はちよつと聞いてたんですけど・・・。課長が
そう望んだ訳では無いって事ですよね？」

「・・・他に好きな男が出来たから離婚したいって。・・・だから
正直、飯橋が今でも昔の男を

引き摺ってるのを聞いた時、信じ難かった。良く言うだろ、女は
切り替えが早くて男は何時までも

ズルズルとって。」

俺はグラスの縁に口を寄せた。ちよつと間を置いてからビールを喉
に流す。八神も、俺に倣う様にグラスを手を取った。

「・・・お前、前に昔の男を忘れてなくて良いなんて殊勝な事言ってるって言ってたけど・・・凄いい

自信だなんて思ったよ。」

「や、自信なんて・・・全然そんなんじゃない・・・。」

「・・・どんなに一緒に居ても、その裏には別の顔があるのと一緒にじゃないか？」

俺の場合は、離婚に至る迄それに気付きもしなかった・・・。」

俺の話に八神の言葉数が少なくなった。

俺の過去は、残酷なまでに八神を蝕み始めている。

「・・・あ、まあそれは俺の方の話だ・・・飯橋は既にお前の事を本気で好きなのかもしれないしな。」

「・・・。」

八神は時折唇を食み、視線を彷徨わせる。今、コイツの頭の中は焦燥感でいっぱいになっている。・・・ちよつと、遣り込め過ぎただろうか。

暫くの逡巡の後、八神が口を開いた。

「不安ですよ。俺達を繋いでるのは何なんだろうって思いますよ。」
グラスを抱え、皿の並べられたテーブルを八神はじっと見ていたが、顔を上げると眉を少し下げ寂しそうに笑う。

「・・・んか今日、課長、意地悪いっスね。どーんと構えてろよ、位言っして下さいよ！」

最後の方はわざと声量を上げて、八神はグラスの中のビールを飲み干す。

理由も無く、ただ闇雲に突っ走ってる訳じゃないんだな、一応。

目に見えてるものだけが全てじゃない。

「どーんと構えてろよ。」

「俺が言っただまんまじゃないスカあ!!」

何時ものように笑顔を見せる八神に俺がビールを注ぐと其れを奴は一気飲みする。

誰かのものを奪おうなんて思ってない。

でも、既に手に入れてしまったこの感情は何処にもやれない。想うのは勝手だろう？

そして、お前を試す事位許せよ、なあ八神？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402m/>

REBOOT

2011年7月23日12時28分発行